地を渡る舟

― 1945／アチック・ミューゼアムと記述者たち ―

作　長田 育恵

Tegami-za

■ 登場人物

【アチック・ミューゼアム研究者】

宮本　常一（つねいち）　瀬戸内海周防大島出身の農民・元小学校教師

生田（いくた）　哲郎（てつろう）　東大卒、柳田門下から離反してきた民俗学者、留学経験者

桐生（きりゅう）　登志夫（としお）　東大卒、喜界島など南西諸島研究のフィールドワーカー

林（はやし）　逸馬（いつま）　元日本画家、愛知県奥三河「花祭」研究家

吉永（よしなが）　修司（しゅうじ）　法政大卒、肥料から見る農村社会を専門とする研究者

【渋沢家】

渋沢　敬三（けいぞう）　渋沢家当主、アチック・ミューゼアム主宰、第一銀行副頭取

渋沢　誉子（たかこ）　敬三の妻、岩崎財閥の出身

向田（むこうだ）　志野（しの）　渋沢家現女中頭、先代 篤二のお付き女中

小川　りく　渋沢家見習い女中

【戦時下の人々】

比留間（ひるま）　敦　大日本帝国陸軍憲兵司令部大尉・のちの陸軍省軍務局役人

一ノ瀬（いちのせ）　かつら　大阪 密柑山出身の娘

宮本　真木（まき）　常一の妻・大阪在住

田川（たがわ）　松太郎（しょうたろう）　島根と広島県境の農民

茂木　公雄　大日本帝国陸軍、比留間の部下

ほか

■場所

主となる舞台は、東京三田綱町、渋沢邸の敷地内に、本宅とは別に建てられた、木造二階建ての『アチック・ミューゼアム』（屋根裏の博物館）。その集会室。
かつては車庫の屋根裏にあったことからその名がついたが、現在は独立した建物となり、渡り廊下で本宅と繋がっている。

その他、日本の僻地にある村・焦土と化した都市など。

■時代

昭和一〇年の春から昭和二〇年の夏を主として描く。
（昭和七年に満州国建国、八年に国連脱退、防空演習が既に始まっている。昭和一一年に「二・二六事件」が起こり支那事変へ突入、やがて昭和一六年に太平洋戦争へと発展する。）

第一場

昭和二〇年七月（１９４５年）。朝。
日本常民文化研究所（旧アチック・ミューゼアム）、集会室。
電灯には灯火管制の暗幕が巻かれ、雨戸が閉まっている。
本邸から続く渡り廊下から、りく、掃除用具を持って来る。
引き戸の前で少しためらうが、開けて中に入る。
部屋を見渡す。止まったままの時間を確かめるように。
志野、様子を見に来る。

志野　どうです、そちらは？早くしないとまた空襲が。
りく　……志野さん、やはりこの部屋も？
志野　仕方がないでしょう。旦那様のお言いつけです。この渋沢邸、焼けだされた皆さんを最大限受け入れる。三田警察もすぐに移ってきたいそうですよ。
りく　ですが――ここは研究室です。すぐに学問をはじめられる場所なんです。
志野　世間がなんて言いますか。渋沢は人の命より学問が大事か？
りく　――、
志野　あなたの気持ちはわかります。が、今はその時ではありません。頼みますよ。

志野、本宅へ去る。
りく、机の上のノートを手に取る。ためらいがちに捲ろうと――、
廊下、ミューゼアム玄関側から男の影。引き戸が開けられる。

りく　――申し訳ありません今、（掃除を）
常一　やあ。りくちゃん、

りく、振り返る。そこには焼け跡を歩いて来た宮本常一がいる。

常一　幻じゃないぃね？東京駅に着いてからこっち、あたり一面くすぶっちょってこりゃあだめじゃと覚悟しちょったが。まさか焼け残っちょるとはの！
りく　……宮本さんこそ、幻じゃないんですか。お手紙出したんですよ……、
常一　すまんのう。ほとんど家におられんくて。元気そうじゃの？
りく　――、
常一　先生はおられるかいの？
りく　旦那様――どうでしょう、もうお出になったかも、
常一　急で悪いんじゃが、すぐにお会いしとうて。
りく　まさか宮本さんも？
常一　いいや。知っちょろうが？こんな肺病上がりの不良品、戦争の役には立たん。

りく　……、
常一　なんでもないんよ。先生のお顔を見とうなってな。
りく　――分かりました、お待ちを。

りく、出ていく。
常一、集会室の民具一つ一つを手に取る。ついている札の名前。

常一　桐生さん。吉永君。林さん。……生田、

渡り廊下から、渋沢敬三が来る。日銀に出勤する前の背広姿。

敬三　宮本くん、
常一　渋沢先生。ご無沙汰しておりました。
敬三　よかった。ちょうど出るところだった。痩せたな。
常一　……先生も。
敬三　挨拶は抜きにしよう。どうした。

常一、懐から電報を取り出す。

常一　これを。出頭命令です。
敬三　出頭？「陸軍省軍務局」？――（目を通す）これだけじゃ何も、
常一　ええ……。
敬三　心当たりは。あるだろう何か。大阪で何をしていた。
常一　……ただ歩いちょりました。これまで辿ってきたところを。
敬三　だが、それでなぜ東京の陸軍省が、
常一　……、
敬三　行ってみるしかあるまい。
常一　（笑う）がっかりされんにゃええですが。こんなつまらん人間――歩いて、ただ歩いちょるだけの者（もん）ですが。
敬三　その場で身柄拘束となるなら、僕の名を出しなさい。「自分は日銀総裁 渋沢敬三の家から来た。渋沢の家の者だ」。
常一　先生……、
敬三　帰ってこい。必ず。

りく、来る。

りく　失礼します。旦那様、お車が参りました。
敬三　きみが乗れ。りく、銀行には午後から出ると伝えてくれ。宮本くん、午後一時まではここにいる。陸軍幹部を連れて来たっていい、とにかく一度はここへ戻ってこい。
常一　はい。
敬三　行きなさい、すぐ。僕も陸軍の知人に連絡しておく。

常一、敬三に深く礼をする。敬三、本宅へ急いで去る。

りく　陸軍？……宮本さん、
常一　なんでもない！びびらせて悪かったの。ほいじゃあ、
りく　……あの、
常一　ん？
りく　約束、覚えてますか？
常一　約束？――ああ。待っちょってくれ。もうちょい。

常一、出て行く。
りく、再び机の上のノートを手に。その表紙に指を。

りく　――『アチック・ミューゼアム　１９３５』。

かつてこの場所に出入りしていた人々、研究所員達、現れる。
民具の数々、資料などを持ち寄り、研究所を創り上げていく。

第二場

昭和一〇年五月（１９３５年）。午後遅く。
アチック・ミューゼアム集会室。
机の上には何本もの徳利が置かれている。
桐生登志夫、徳利に所蔵番号を付けようとしている。
吉永修司、収蔵庫から研究室へ、民具を運んでいる。

桐生　なあ、どっちがいい？通し番号と別で番号立てるの。やっぱり陶器は陶器、独立させるべきだよな？
吉永　――、
桐生　いいか、これはある種のメルヘン、避けられない出会いってやつだ。岡山入りする山越えでようやく麓に近づいたわけだよ、背丈の低い笹がびっしり生

い茂ってるところで、

吉永　Märchen、

桐生　ん？

吉永　Märchen（メェルヒェン）。ドイツ語ですから。気になって。

桐生　つまりな、昔、そのあたりにあった窯元が焼き損なったのを捨ててたんだ。

吉永　だからって。

桐生　盲点じゃないか？とりあえずあの辺の窯元を幾つか回って貰ってきたが。古い窯元は今のうちに回るべきだ。なくなる前に掻き集めて、

吉永　桐生さん。わかりますが足りないんじゃないですか？自覚。決めたでしょう。今は所員全員一丸となってまとまった成果を出そうって。今の強化項目はなんですか？

桐生　草鞋。

吉永　収蔵庫だって片付いてないんです。趣味に走って収集したら、収拾つかないじゃありませんか。

桐生　うまい、

吉永　Teamwork（ティームウォーク）。これでしょ、うちの標語は。

桐生　イヤミな発音だね。英語も。

本宅への渡り廊下から向田志野が来る。渡り廊下から中庭を見て、

志野　ちょっと。剪りすぎないようにしてください。新しい植木屋さん？旦那さまは本来の姿をとどめるくらいがお好みですから。

志野、集会室に入る。

志野　失礼します。お夕飯の人数なんですけれど、先日仰ってた方、今日でしたか？

吉永　あれ、今日……だったかな。

桐生　明日だよ。俺が東京駅まで迎えに行くことになってる。手帳にもちゃんと書いてある。

志野　では、こちらはいつも通りで。

吉永　何かあるの。

志野　今日は新しい女中が入りますもので、

吉永　歓迎会ですか。

志野　奥様がお夕飯にもう一品、小鉢をお付けくださるって。使用人全員、もちろん研究所の皆さんにも。

桐生　ほう、

志野　何がいいかしら。菜の花とホタルイカの酢味噌あえ。うるいの豆腐寄せ、

桐生　白和えなんかもいい。
吉永　志野さん。新しい女中さんて、どんな子？
志野　さあ。約束の時間をもう一時間も過ぎております。厳しく仕込まないと。
桐生　また辞めちまうよ。
志野　構いません。この渋沢家、子爵を冠する家として守るべき伝統と格式があります。使用人といえども落ち着きと威厳を持って、

中庭からカシャンと瀬戸物が割れる音。中庭から林逸馬がテニスラケットを持って、爆笑しながら飛び込んでくる。

林　諸君聞いてくれ！悲しい知らせだ、
志野　……あなた方は、
林　志野さんすんません、植木鉢、
志野　笑いながら言うんじゃありません。いい加減になさいまし、奥様がなんて仰るか。旦那様でも庇いきれませんよ！

志野、中庭を覗く。割れた植木鉢の実物が見えたらしい。

志野　（叫び）

志野、植木鉢をものすごい剣幕で見に行く。
生田哲郎、テニスラケットを持って中庭から入ってくる。

生田　すみませんでした！だから嫌だって言ったじゃないか。弁償できるか！
林　気にするな。あれは元々割れてたんだ。前に俺が。
生田　あ？
林　それより諸君、酷い話だ。
吉永　なんです。
林　柳田國男（やなぎた）の秘蔵っ子、秀才できこえる生田氏は、はっきり言って運動音痴だ。
生田　林、
林　（爆笑）ぶひゃひゃひゃ、
吉永　助っ人ならずか。
桐生　来るがいい、戦力外通告の席だよ。
生田　理屈は分かってるんです。ただ瞬時に対応するのが難しいってだけで。
林　生田は理性が邪魔しとるな。
吉永　第一回渋沢邸テニストーナメント、我らアチック連合軍、早くも暗雲が。

林　軍じゃない、既にペア（吉永・林）。
生田　何をそんな。たかが書生連中と戦うだけだろ。
林　参加者で出し合って賞金を作るんだよ。柳田先生のところはどうだか知らんが、我らは「食う」「寝る」と研究費は保証されてるが、「着る」は自前だからな。ちょっとの小遣いでも嬉しいもんさ。
生田　いや恵まれてる。贅沢すぎるだろ。独立した離れ、出版計画、地方の同人にも何らかの保証をしてるわけだろ？その金は、失礼、やはりすべて渋沢家、渋沢栄一翁の遺産か？
林　いいや。先生個人のポケットマネーだ。
生田　ポケット、……全額？
桐生　今の先生は第一銀行の取締役とは別に、よその会社の役員もいくつもなさってる。その収入をこちらに入れてくださってるわけだ。
生田　それは……。できますか？そんな、注ぎ込むばっかりで見返りもないような。
吉永　そうなんです。先生は我々の理解のはるか上を行く。しかも、ご自分の本職は銀行家だとおっしゃって、あくまで黒衣に徹しようとなさる。
生田　……柳田先生とは違うな。
林　まあな。柳田先生はもっと別の――そもそも柳田先生が民俗学を打ち立てなきゃ、
生田　確かに、柳田先生がこの国に眠っていたものを揺り起こした、それは事実だ。雑誌には地方の連中がこぞって投稿してる。山のような葉書が来る……、
桐生　柳田先生以降、どんな僻地の偏屈親父も一流の郷土史家っていうわけだ。
生田　その連中がこぞって先生のデータマンになる。彼等が集めてきたものを先生は自分の名で出す。「遠野物語」だってそうだ。他人を踏みつけて、ご自分一人が雲の上までのし上がる、それが先生のやり方なんだ。
吉永　どうかしましたか？
生田　え？
吉永　生田さん、柳田先生と何かありましたか？
生田　……何も。――すいません、ちょっと届け物に来たはずが。
林　おい。なんだよ！何があったかしらんが、そんなんじゃ柳田先生も、
生田　帰ります。
林　待てよ――もういっちょ付き合え。
生田　はあ？
林　いいから。ちっとは抜いた方がいいんだ、お前は。
生田　どうせまた笑いものにするんだろう。運痴で悪かったな。
桐生　でもなぁ、あん時はうまかったのにな？きみ、運動神経忘れてきたんだろ、奥三河に！
吉永　「花祭」！そうだ、踊ってましたね！

林　今年の正月！
生田　あれは。夜通し祭を観てるわけですから。酒も入って眠いのと寒いのと、
林　無我の境地、それだ。あの感覚を思い出せ。♪テーホヘテホヘ、

テーホヘテホヘ、テホトヘテホヘ。「花祭」榊鬼の踊り。
桐生・吉永・林が率先して。生田も思いきって参加する。
次第にそれは変形し、よく分からない型の騒ぎになる。
渋沢誉子、入ってくる。

桐生　奥様――、
林・吉永・生田　！　失礼いたしました！

誉子、踊り狂っていた四人と机の上の徳利を見る。

誉子　……感心しませんね。日も高いうちから。そのお酒は？志野が？
桐生　ちがっ、これは。――違います、その……研究の、
誉子　研究？
桐生　違います、や違いませんが――すべて空です、
林　空です、奥様。
桐生・林・吉永・生田　（素面です！）
誉子　どちらにしろ旦那様があなた方にはこういうことをお許しになる……、
桐生　……いえ、
誉子　旦那様は？こちらにおいでかしら。銀行から今日は早くお出になったと連絡があったのだけれど。
吉永　こちらには。今日はまだ。
誉子　お加減が悪いのかもしれないわ。今朝、お咳をしてらしたし。あなた方が昨日も真夜中まで引止めるから。
吉永　それは先生が、
林　（吉永を止める）
誉子　いらしたらお伝えして頂戴。私（わたくし）がお話がありますと。それから、志野を呼んで片付けなさい。いくら旦那様のお許しといえ、……見苦しい。

誉子、出て行く。

林　（生田に）……気にするな。奥様は三菱財閥の岩崎家ご出身なんだ。俺たちみたいなのはどうも。

誉子（声）　誰か、
桐生・林・吉永・生田　！
誉子（声）　中庭に。そちらの客人ではありませんの？（去る）
吉永　――桐生さん、
桐生　あ、宮本くん？――え、今日だった？

桐生、玄関の方に走っていく。
玄関の方から騒ぎ。一ノ瀬かつら、大きな荷物を持って入ってくる。

かつら　どうも。
吉永　なんだ。かつらさんか。
かつら　なんだとはなんや、
林　おい、正門から入ったんじゃないよな？
かつら　重たいねん。いちいち文句つけんといてほしいわぁ。それに今日はおミソつきやし、
桐生　いいからちょっと離れろ――すいません、こっち。どうぞ！

常一・りく、玄関から恐る恐る入ってくる。
明らかに上京したてのその姿、屋敷の圧力に萎縮している。

常一　失礼します……、
吉永　宮本さん！と、（そちらは？）
りく　――うぁ、（堪えていた涙がどっと溢れ出る）
吉永　ええっ？！
りく　しょ――初日から遅れました……。小川りくと申します。女中頭の向田志野さんはどちらでしょうか？
吉永　志野さんなら本宅に。この渡り廊下あっちにずーっと――ねえ、連れてってやろうか？

りく、会釈して廊下を走っていく。

吉永　かつらさん、何したの。
かつら　案内したげただけやない。おんなじ東海道線やったの。東京駅の改札でこの人らが犬ッコロみたいにウロウロして。三田の渋沢邸に行きたい言うてたから。やったらうちについといでって、
常一　ほいじゃけどまさか歩くとは思わんけえ、
かつら　歩くやろ。東京駅から三田くらい、

桐生　宮本さん。申し訳ない、俺が向かえにいくはずが。アチックの桐生登志夫です。

常一　はじめまして、宮本常一です。

生田　っていうと……柳田先生の「郷土研究」に投稿してらした？山口の、周防大島の昔話。

常一　ええ、……読んでくださったんですか、

生田　興味深かった。瀬戸内海の真ん中から投稿が来るなんて。しかもあの力作、先生もお喜びになって、

常一　柳田先生が？その、あなた――直接お話しされちょるんですか？

生田　生田哲郎です。今日は柳田先生のとこからたまたま、

常一　それは……（手を服でよく拭って生田の手を）光栄です。なんもわからんで書いたもんを読んでくださったばっかりか、雑誌にまで載せてもろうて、ああ、大変だったろう。仕事をしながらあの量は、（常一の手をさりげなく解き、手を自分の服で拭く）

生田　宮本さん、お仕事は？

吉永　今は大島からは出て、大阪で小学校の教師をしちょります。

常一　先生か。アチックの吉永修司です。今、法政大学の三年です。こっちは林逸馬さん。元日本画家。

吉永　渋沢先生がわざわざ大阪出張で訪ねて行かれたそうですね？

林　はい……こっちにも一度遊びに来なさいと。今日は、盆と晦日と正月がいっぺんに来たみたいです。まさか自分がここにおるなんて。

常一　桐生・林・吉永・生田　（笑う）

桐生・林・吉永・生田　なー、ちょっと、重たいねんけど。

かつら

かつら、荷物を机の上に開ける。大量の草鞋・足半が溢れる。

桐生　これは……！

常一　草鞋、

生田　それと、足半（あしなか）だ。草鞋より丈が短い、踵の部分がないだろう。こんな大量に。

かつら　あんたが欲しいて言うてたから。これでええ？

桐生　ああ。……ああ！凄いな。どうやって集めた。俺たちが回ってもこんなには、

かつら　そら大学出のにいちゃんらが、くれっちゅうてもくれへんわ。あんな、仲良うしてる瞽女（ごぜ）の姉ちゃんらに頼んだんよ。

林　瞽女か――恥ずかしながらまだ会ったこともない。

吉永　俺も。

かつら　新潟の高田っちゅうとこに瞽女屋敷があってな、姉ちゃんらはそこの人なんよ。三味線弾きの巡業先でな、もろてきてもうた。

桐生　巡業は。どこを回ったと。

かつら　（懐から書き付けを出し）覚えきられへんし。

桐生　新潟県東頸城郡（ひがしくびきぐん）――長野の村にも行ってるな、

林　こないだの壱岐から持ち帰った二三点は。

吉永　男鹿半島含めて採番済んでます。草鞋・足半の収集点数これで三百は越えるんじゃないですか。

生田　面白そうだ。もう少し居てもいいかい。

吉永　もちろんです！

かつら　あんたも座ったら？

常一　ええんですか。

かつら　余ってるやないの、椅子。うちな、この人らのこういうの見んの好きやねん。阿呆やろー。みんなが棄てるボロボロのもんに夢中になって。ほんま、どこが面白いんやろか、

古文書の引き写し、日本地図、収蔵資料など、所員たちが動く中、渋沢敬三が玄関側から入ってくる。手には茶封筒。

敬三　――やってるね。

吉永　先生！お帰りなさい。これから始めるところです。

敬三　（机の上）すごいな、これは……！かつらくんか。

かつら　センセ。どうも。

桐生　新潟の瞽女さんたちが回って集めてきてくれたそうです。一級資料です！

林　今日は柳田先生のところの生田さんもいらっしゃいます。

敬三　やあ。久しぶりだね。

生田　ご無沙汰しております。柳田先生は目に見えない物を対象とされますが、アチックは目に見える物、手に取れるもので話をするんですね。

敬三　ああ。柳田先生のやり残したところを拾ってく。それなら怒られない。

生田　確かに。

林　それからこちら、

敬三　――宮本さん。よくお越しくださって。遠いところありがとう。

常一　……先生、もったいない、……ありがとうございます。

かつら　センセが頭下げはるやなんて、この人そんなに偉いひとなん？

敬三　偉いよ。周防大島の農家の生れでね、貧しい中で苦労して、郵便局で働きながら師範学校に行かれたんだ。

かつら　ふーん。――ってセンセ、それ苦労人ってだけやんか。東大出のこの人らの方がずーっと偉いんちゃうん？

桐生　かつら。すいません宮本さん、こいつ、あまり分かってないんで。

常一　いえ。わしもそう思います……。なんで先生がお呼びくださったんか。

敬三　一度ゆっくり話してみたかった。悪いか？――はじめよう。宮本さんも良かったら。ここの学問にルールはない。ただ一番大切にしているのは、Teamwork。

吉永　そう。Harmonious Development――人間関係の調和。

敬三　……はい！

常一　それから野に在る――在野精神だな。研究も、官におもねることなく、ひたすら野を行く。美しき鹿のように。

敬三　鹿ですか！

かつら　猿やのうて？

常一　諸君がそういう研究者に育てば、僕はもう思い残すことはない。――（茶封筒）とうとう行ってきた。

吉永　先生。この封筒は……、

桐生　巣鴨の癌研究所。ついにみてもらったんですね……！

生田　癌研？！

敬三　諸君、心配掛けたがこれではっきりした。病名は、

生田　笑い事じゃない！先生、まさか、

敬三、封筒から写真を出す。

生田　ん？……あ！

写真は草鞋のレントゲン写真である。敬三、所員達、爆笑。

生田　足半をレントゲンで？！

敬三　世界広しと言えども、草鞋をX線に掛けたのはアチックが初めてだろう！

生田　大人げない。……いえ！

敬三　かねてより議論の対象だった足半および草鞋の内部構造について。これにより土台となる芯縄は、並行式と交差式、二種類あることが判明した。

吉永　えーこちらも、収集資料をあたりまして、鼻緒の結び方も大別すると全部で八種類に集約されることが分かりました。林さんに結び方の特徴を描いていただいています。

林　まあ、この分類で行くと、いま上野に建ってる西郷さんの銅像、あれの鼻緒が右縄D型になっとるが、鹿児島の当該地域は左縄の地域であり、あの銅像

はまったくありえん、間違い！ちゅうことになる！

桐生　いや、鹿児島県下をもっと詳しく、細分化しないとその断言はできんだろう？飛び石のように一例でも他の村と異なるところがあれば、間違いとはいきれんじゃないか？

かつら　（常一に）な？阿呆やろー。

敬三　吉永くん、文献は？

吉永　調査を進めています。いつから日本人がこの形のものを履きだしたか。「犬追物絵巻」で明らかに描かれているのを認めるほか、現在は鎌倉時代に遡って調査しています。源平記にも既に記録が。

かつら　源平記？

吉永　もともと武士の履き物だったのが戦場に駆り出された農民たちに伝わって、農民が戦場から持ち帰ったのが全国的に広まったと仮説を立てていて。やっぱり収集をすすめないと全国分布がわかりませんね。もっと各地にかつらさんのような収集協力者を増やして、

常一　……川、

桐生　ん？

常一　言うてもええでしょうか、――大阪近くを歩いたとき、川沿いの曳舟の仕事をしとる連中がこれと同じ、カカトのない足半を履いちょりました。水辺で踏ん張るんに滑り止めが必要な連中は、これが便利なんじゃないでしょうか。

敬三　いい着眼だ。地域ではなく地形。その分布で収集を試みるというのか。

吉永　地形特有の産業に着眼して収拾の優先地域を絞り込む。……考えてみます！

桐生　俺は鼻緒の「結び」に着目したい。各地にある草鞋・足半説話の謎だ。この「結び」に神秘的な意味を与え、外敵や病魔の排除に使用する例が多い。同じ信仰は、朝鮮半島でも見られる。この信仰がいつ頃日本に根付いたかそれを辿れば、信仰のネタ元が分かるはずだ。

かつら　待ってや。ネタ元？信仰なんてもん、昔ッからあたりまえに先祖代々あるもんやん。ぶわーっと空気みたいに！それが作り物やて言うん？

桐生　ああ。時間の中で、日本て国の形にしっくり合うように、粘土みたいにこねられてな。生田君、きみが留学してたヨーロッパはどうだった？履き物信仰っていうのはそっちでも、

生田　……、

林　生田？

生田　……なんなんですか、みなさん。遊んでるんですか。

林　は？

生田　口元緩んでるじゃないですか。渋沢先生も。これが研究会ですか？子供が土手の原っぱで球でも追いかけてるみたいじゃないですか。

敬三　生田さん。その――柳田先生の所に比べたらそう感じるのかもしれない。だ

がな、モノを手がかりに、モノとモノとを比べて、その間にある繋がりや息吹を読み解く。なんせモノは、

生田　人から人に受け継がれる？

敬三　ああ。受け継がれ磨かれて、定まった形だ。これ一つとっても永年の生きた智恵の結晶なんだ。そこに手を伸ばす。僕は意味があることだと思うがね。

生田　……ありますよ！意味は！分かってますよ！

桐生　きみ、やっぱりなんかあったろ？柳田先生と。

生田　……言い争ったりはしてませんよ。ただ先生が、俺の論文をご自分の名前に書き換えて雑誌に載せた。それだけです。なんの断りもなく。先生はご自分がそうすることを当然と思ってる。よくご存知だよ！俺が何も言えるわけないって、

敬三　穏やかではないね。

りく、渡り廊下を本宅の方から来る。女中の着物に着替えている。

りく　失礼します。あのう。お夕飯の仕度が出来ました。皆さま食堂の方に……、

（異様な雰囲気を感じる）……あの、

吉永　行くよ、今。ありがとう。

生田　……先生、俺もここへ置いてもらえませんか、

敬三　なんにせよ、柳田先生の所へ挨拶に行かねばなるまい。話はそれからだ。

生田　はい……。

桐生　食ってけよ、生田君。今日の夕飯は豪華版なんだ。つくんだろ？特別に一品。

りく　何になった。

桐生　桜エビの茶碗蒸しです。

林　うまそうだ。

かつら　（生田の背を叩く）

吉永　もーお腹減ったわ。（誰よりも早く本宅の方へ向かう）

敬三　かつらさん早ェ。

常一　宮本さん。

敬三　はい、

常一　きみは今日は僕の客人だから食事はホールで。あとで僕と一緒に。

敬三　……はい、

かつら・桐生・林・吉永・生田、本宅の食堂へ向かう。

敬三　きみ、

りく　はい。

敬三　志野に言って、葡萄酒を。
りく　葡萄酒、でございますか？
敬三　あの葡萄酒。そう言えば分かる。
りく　かしこまりました。

りく、出て行く。

敬三　さて。よく来たね。アチックをどう思う。
常一　夢みとるみたいです。心が煮立つみたいに沸き立って、――すいません、先ほどはつい。自分のようなもんが皆さんの研究に口出しを。
敬三　宮本常一。――別人だったら言って欲しい。僕は間違いなく、宮本常一という人にわざわざここへ来て貰ったんだが。その人は僕が尊敬する人だ。
常一　……なにを、
敬三　その人とは大阪の座談会で会ったんだが――凄いんだよ、酒に酔って万葉集を諳んじだしたんだ。勉学で覚えたもんじゃない、山道を歩きながら、自然に入ったんだ。頭じゃない、血の中へ。前に柳田先生の雑誌に載ったのを拝読していたが、それで妙に得心がいった。その人はほんものの、今を生きる万葉人じゃないかと思った。
常一　子供の頃、祖父に育てられて、山の畑を手伝ったり昔話聞いたりしちょりました。自分のようなやつは田舎にいきゃなんぼでもおる。先生みたいな立派な方にお褒めいただくようなもんでは。
敬三　立派と言うがね。僕が何を持ってる？金。社会的地位。それから血筋？渋沢栄一という偉大な祖父？僕が、挫折の道を歩んでいるとしても？
常一　――、
敬三　生物学者になりたかった。お祖父（じい）さんとも親戚とも随分戦ったがね……。渋沢家の次期当主に決まったのは一九の頃だ。――諦めの広野。やけにびょうびょう風が吹いて、あれ以来僕は、自分の人生を誰か別の人間となって生きている気がする。ここだけだ。本来の自分に近づけるのは。
常一　先生、
志野　失礼いたします。

志野、戸口に控えて声を掛ける。年代物のワインとグラス。

志野　旦那様、お持ちいたしました。こちらで。
敬三　ああ。――お祖父さんが残した葡萄酒だよ。
志野　差し出がましいようですが、旦那様。こちらは――奥様もお飲みになっては。

敬三　内緒にしてくれ、志野。――宮本さん、これはね、お祖父さんが徳川使節団の一員でパリ万博に行ったとき、フランスの皇帝ナポレオン三世から土産にもらったものなんだ。

常一　――は。そんな、

敬三　これを開けよう。さあ、

敬三、志野にオープナーを求めると、コルクに突き刺す。

常一・志野　（ああっ！）

敬三、ワインを開ける。

敬三　（匂いを嗅ぎ）ん――いけそうだ。さ、宮本さん。

常一　……飲めません、

敬三　死にゃあしないさ。

常一　（そういうことじゃ、）

志野　……旦那様！

敬三　ん？

志野　――奥様からのご伝言です。お仕事からお戻りになられたなら、一度はお顔を見せてほしいと。お話ししたいこともありますからと。

敬三　あとで行く。

志野、礼をして去る。

常一、グラスを持つ。片手で持つが震えるので空いた手を添える。

敬三　乾杯。

敬三、飲む。常一も一口飲む。

敬三　渋――くない。渋くないぞ！奥に葡萄の甘みがちゃんと。……おお、

常一　……。

敬三　宮本さん。アチックに来ないか？

常一　……先ほど、先生が仰ったモノとモノの話。よく分かりました。わしもその先にあるもの――人と人をつなぐもんに触れたい、

敬三　ああ。

常一　ありがたいと思います。ほいですが、大阪に家と、妻が。

敬三　考えてもらって構わない。長く家を空けることになるだろうから。だが、時

常一　間がないんだ。
敬三　どういうことです？
　　これ（足半）と同じだ。今ならばどうにか集められる。だが、すぐに誰もこういうものは履かなくなるだろう。粗末なものから消えてなくなる。人も同じだ。
常一　……人も、
敬三　名もなき農民、漁民――この国の古い暮らしが消えないうちに、君はその中で生活し、その人たちのありのままを書きとめてもらいたい。学者はたくさんいる。が、君には資料の発掘者になってもらいたい。学者が学問をするための生きた資料を――分かるか？
常一　ええ。
敬三　手始めに何か書いてもらえたら。……周防大島。きみの故郷はどうだろう。大島を。
常一　瀬戸内海の要所、ひらかれた海。一生の研究テーマにもなりうる場所だ。あるはずだ、生まれついたきみだから見えること、
敬三

　　生田、来る。

生田　お話し中失礼します。資料を拝見しても？
敬三　ああ。どうぞ。話は済んだ。
生田　すいません、
敬三　（常一の肩を）考えてくれ。――生田さん、ごゆっくり。宮本さんも。
常一　先生、
敬三　顔を出してこんとな。

　　敬三、ワインを持って去る。

生田　（鞄に行きかけてワイングラスを見る）なんだ、いいものを。
常一　いえ、これは。（無理にワインを飲み干す、むせる）

　　生田、自分の鞄から煙草を取り出し火を付けようと、

生田　なんだい。アチックに誘われたのかい。
常一　……、
生田　本当に？――（笑う）大した違いだな。請われて入るのと押しかけるのと。妙な巡り合わせだ。
常一　いや、自分は……そういうのではないんです。先生からは学者にはなるなと。

発掘者になるよう言われました。

生田　へえ？……渋沢先生もそんなことを。きみはいいのか、それで？

常一　いいとは。……皆さんのために働ける。もったいないことだと、

生田　（笑う）――失礼。確かに、きみなら適任だ。

生田、鞄の中から用紙を取り出す。

生田　宮本さん。これ。柳田先生が使っている調査項目票だ。先生は全国にいる同士にこれを渡して記入して貰ってる。良かったら参考に。

常一　ありがとうございます。助かります。正直、何をどうしたらええんか、

生田　なに簡単だよ。きみはなにも考えず、項目に添って箇条書きにすればいい。

常一　考えるのは僕らがやるんだから。

はい。

常一、調査項目票に目を走らせ、足半の山から一つを手に取る。

生田、そんな常一を見ながら、同じく足半を手に取ってみる。

生田　――なんか拾ったら見せてくれよ。

生田、足半を元の山に無造作に放る。本宅の方へ戻っていく。

常一、生田の表情には気付かない。ひとり足半を握りしめる。

第三場

数日後。大阪、阪和線 鳳駅。

生活の渦にある駅。夕刻の利用客がせわしなく行き交う。

駅前の電灯の下、妊娠七ヶ月ほどの真木が夕飯の買い物帰りの荷物を抱えている。駅から常一が出てくる。

真木　あんた！

常一　……真木、

真木　この電車やないかー思うて。当たりやったわ。はい。（荷物を持たせる）

常一　（意外と重い）お――なんや、芋？！

真木　市場で安かってん。

常一　買いすぎや。

真木　せやけど芋ばっか食べたなるんよ。塩いーっぱい振って。

急ぎの男が後ろから真木にぶつかる。
真木、よろけるところ、常一が支える。

常一　（男に）気ィつけェ！ボケェ！
真木　ええよ。
常一　ほいでも、
真木　ええって。……おかえり。どやった東京は。
常一　ああ。
真木　渋沢先生いう人には会えたん？
常一　……会えた。
真木　話してなんやったん？
常一　まあ……、
真木　なんやのん。ぐずぐずして……。まあええわ。（帰ろうと）――東京でうまいもん食べて来たん？うちはアジの開きや。
常一　――真木、
真木　ん？
常一　わしの、学校辞めようと思う。
真木　は、
常一　もちろん今すぐっちゅうわけじゃない、ほいでも、
真木　待って、……え？
常一　……じゃけぇ学校。東京の渋沢先生んところへ行く。先生のお宅にある研究所に入るんじゃ。
真木　話ってそれやったん？
常一　……。
真木　入るって？……うち東京なんて行ったことあらへんけど、
常一　いや、わし一人で。重大な仕事なんじゃ。民俗学のために、
真木　民俗学いうのんがなんか、そんなん知らんけどな、ぶらぶら歩いてなんか書くんやったら、これまでもずっとやってきてるやないの。淀川の乞食のとこにも通てたやん。知ってんねんで。
常一　ああ。
真木　それではあかんの？
常一　これからは片手間じゃできん。日本中、隅の隅まで歩いてくるんじゃ。
真木　お金は。
常一　金、
真木　給料は？なんぼ？
常一　……旅に掛かった経費は出る。あと、先生のお宅におるときは、食う物と寝る場所は心配ない。

真木　ほんで。給料は。
常一　――仕送りはする。なんとか、金は作る。
真木　この子どうするん？そんなもんでこの子育てられるん？――話にならんわ。
常一　心配なら、周防大島の、わしの実家に行ってもろうても構わん。
真木　うち一人で？――阿呆くさ。この話は仕舞い、
常一　……、
真木　仕舞いや。
常一　賭けてみたいんじゃ、
真木　――、
常一　この先、ここにおってどうする？目ェつむーても先のことは見える。まともな教育受けとらん奴が校長になれるわけでもない。肺ん中の穴もいつまた開くか分からん、そのうち島へ帰って畑をやる――それ以外何も許されとらん！でも渋沢先生は言うてくれた。わしやけえ拾うてこれるもんがある。他の、先生方には出来んことがある。ここでなら身を立てる道があるかもしれん。土俵に上がれるかもしれん。
真木　――決めとんなら相談なんかすな！カス！

真木、常一に渡した荷物を奪い返し、去る。

第四場

風の音はいっそう強くなり、波飛沫が混じる。
それは、山口県周防大島の海。常一、自宅での心象風景か現地か。
常一、手帳を取り出す。海の音の中で書き付ける。

常一　「この稿を綴っていると、どうかすると、遠くの方で、波の音がするように思えることがあった。あの音は生まれて十七の年になるまで毎日聞き続けてきた、いわばなつかしい子守歌であった。ジッと耳をすますと、風がなんの風であるか、あの波の音で判るほどになっていた。」……、

第五場

闇の中からラジオの音声。日本軍のノモンハンでの戦果を報じる。
昭和一四年七月（１９３９年）、午後。ミューゼアム集会室。
林、和紙を広げ絵筆を走らせている。「花祭」の画の草稿。

林　どんどんかっか、どんかっか……、

りく（声）　すいませーん！手伝ってください！どなたか、

もんぺ姿のりく、中庭から集会室に顔を出す。

りく　いるじゃないですか。返事してくださいよ！
林　邪魔すんな。祭り太鼓を聞いてんだ。
りく　ラジオですか。なんて？
林　ノモンハンの大草原、国境殲滅戦いよいよ急調。我が陸軍の荒鷲は各所にて壮烈なる空中戦、ソ連機五十三を撃墜。
りく　強いですね今日も……！志野様と話してるんです、やっぱり日本は神様に守られてるって。（ラジオに向かって手を）
林　神の国か。どうだかな。
りく　え？
吉永（声）　林さーん！そろばんどこです？

寝間着姿の吉永、前をだらしなくはだけたまま、資料を持って収蔵庫から出てくる。りく・吉永、悲鳴。吉永、資料の束を取り落とす。

りく　ななな（んですその格好）！？
吉永　ごごごめん、（前を掻き合わせる）
りく　もう午後ですよ！今起きたんですか？
吉永　起きたんじゃない。寝てないんだ一睡も。あれが寝かせてくれなくて。
りく　あれって？とにかくちゃんとしてください。奥様に見られたら。（資料を掻き集める）
吉永　ああっ、……あ～。
りく　なんです？
吉永　今まで覚えてたのに。数えてたんだよ、メダカの方言！
りく　は？
吉永　方言。メダカの！メダカをなんて呼ぶかで土地の特色が出るんだよ――林さんそろばん。
林　――（無視）、

吉永、二階の階段上へ呼びかける。

吉永　桐生さーん！そろばん使ってますかー！ないんですけどー！（返事はない）
りく　じゃあ志野様がお使いの借りてきますから、
吉永　備品は備品。渋沢邸は渋沢邸。そこは。こないだ志野さんにこっぴどく叱ら

れたんで。
りく　でも、

かつら、二階の階段から降りてくる。同じくはだけた格好。

かつら　いてへんよー？あの人出かけてる。
りく　かつらさん！ちょっ、その格好、
かつら　暑いんよ。
りく　（かつらと吉永）――まさか。寝かせてくれない……？

吉永、壁に貼ってある魚方言の分布図を取ってくる。

吉永　これ！先生がゆうべ完成させた魚の方言分布図！絵も先生が描かれたんだぞ。先生がこんなの完成させたら俺だって。今日は常さんも民俗調査から帰ってくるし！
りく　ヤダ。
吉永　ヤダって。あー（集中が切れた）着替えてくる。

吉永、資料を机に置くと、集会室奥の日本間へ去る。

かつら　志野さんに言うたろ、
りく　ちょっ……、言わないでください！
かつら　これも志野さんの、夜の教育の賜物です～、
りく　かつらさん！……かつらさんこそ何したんですか？
かつら　あ？
りく　昨日！資料の収集からお戻りになったんでしょう？
かつら　せや。
林　今朝、ご町内の警防団の団長がいらっしゃいましたよ。かつらさんのことで。
かつら　何したんだお前、
林　さあ？
かつら　警防団っていや、昨日消火訓練やってたろ。邪魔したのか。
りく　するわけないやろ。普通に歩いとっただけや。東京駅からここまで。いつもとおんなじ。
かつら　同じって……まさか歌ってたんじゃありませんか？歩きながら。
りく　そうや？瞽女の姉ちゃんから聞いた歌ずーっと歌（うと）て、越後追分まで歌い終わるとちょうどお屋敷の塀のとこや。

林　（笑う）
りく　……何考えているです。非国民ですよ！
かつら　国民に非ず！？
りく　笑い事じゃありません。今は国民一丸となって、
かつら　うっとおしいなぁ。国民やの。大日本帝国やの。だいたいなぁ。うち元から国民やったこと一遍もないで？
りく　……え？
かつら　生まれただけや。ここに。たまたま。
りく　生まれたんだから国民でしょう。
かつら　可愛（かい）らしなあ。あんた、生まれただけで国民になれる、そう思てんのん？
りく　はい。
林　法の外つうのはあるんだよ、りくちゃん。今まで外にさんざ置きっぱなしにされといて、今更国民つうのもな。
りく　――、
かつら　知らんでええねん、あんたは。
りく　……どういうことです。ここで暮らして、お国の無事を祈ってる、なのに国民じゃないんですか？
林　神の国。さっきりくちゃん言ったよな。
りく　ええ。
林　それが、国と国民を生み出すために創られたものだとしたら？
りく　……つくられた？
林　この国の連中が国民なんてもんになったのはな、たかだか七〇年前。それまではみんな、家や殿様に仕えてたんだ。今日から仲良く国民です、なんて言われたって考え方も風土も違う。だからこそ、
りく　そんな――そんなふうに言われたら、何を信じたらいいんです？神風をお願いしてもだめなんですか？
林　……俺が知ってる神さんたちは、海の向こうで殺しはせんな。ほら。俺の神さんだ。（絵を）
りく　鬼、
林　「花祭」の榊鬼。村を守る、土地の神だ。
かつら　こういう神さんなら、子供の頃からずっと一緒におったわ。そのへんの花にも、鍋にも。
りく　でもそれじゃ――あんまりささやかすぎるじゃないですか。それでどうやって兵隊さん達を守るんですか？兵隊さん達ずーっと遠くにいるのに！
林・かつら　――、
りく　……やめてください。もっと……役に立つ研究してください、

林　役に立つってなんだ？俺は俺の神さんたちを葬るやつは許せねえ。大きなひとつの神なんて、
りく　やめて！
志野　りく、

志野、作業中のもんぺ姿で入ってきている。

志野　何をしてるんです？呼びに行ったきり、
りく　あ――申し訳ありません。いま戻ろうと……、
志野　なんです。泣きそうな顔して。
りく　……続きやってます。林さん達も早く来てください！
志野　りく？

りく、出て行く。

志野　何を話してたんです？
林　いや、ちょっと。ラジオを聞いてただけですよ。

林、ラジオを消す。

志野　何かあったんですか？戦況はどうです？
林　勝ってますよ。いつも通りです。
志野　そう――、（安堵の笑顔）
林　志野さん？
志野　末の弟が関東軍で大陸にいるんです。うちの村、鹿児島ですが、末の男の子達はみんな軍隊に入って。
林　……ノモンハン、ですか……？
志野　分かりませんけど、戦況を聞く度、あの子たちが立派に戦ってる証だと。手紙を書いても返事はないので、せめて新聞を切り抜いてるんです。
林　そうでしたか……。
かつら　……きっと無事や。志野さん。
志野　当たり前です。神様がお守りですからね。――それよりかつらさん、お話しがあります。お心当たりがお有りでしょうが、
かつら　分かってます。堪忍してぇな。

桐生、集会室に入ってくる。

桐生　よう。
志野　桐生さん、
かつら　お帰り。
志野　ちょうど良かった。桐生さんも手伝ってください。テニスコートを掘り返すんです。
桐生　掘り返す？！なんでまた。
志野　畑にするんです。旦那様たってのお言いつけで。
林　そりゃあ……分かりました、行きます。
桐生　俺は。すいません、昨日あたりからどうも熱っぽくて。
かつら　どないしたん。風邪？
桐生　たいしたことはないんだが。
林　そういや顔色が良くないな。
志野　病院は？お寄りになりました？
桐生　いや。今朝はいきなり工藤教授に呼び出されて。
林　工藤教授？
桐生　常さん帰ったか？
林　まだだ。
志野　宮本さん、二ヶ月ぶりですね！御夕飯、宮本さんのも追加しておきますね。
桐生　あ、二人追加で。常さん、かみさん連れて来るって。
志野　あら。お越しになるのはじめてですね？宮本さんずっとこちらにいらっしゃるじゃないですか。奥さまも大変でしょう。
かつら　子供もおるらしいねんで？うちやったら確実に男作るわ。（桐生に）ウソ。
桐生　……、
かつら　反応してえな！ちょっとは！
林　ほれ、さっさと行くぞ。桐生さん、具合悪かったら横に、
桐生　すまん。様子を見るよ。
かつら　そんなら資料の写真見とったらええ。
桐生　写真――まさか。全部焼いといてくれたのか？
かつら　あっつい暗室ひたすら籠もって。上手いこと焼けたか確認してな。
桐生　ありがとう！

志野・林・かつら、渡り廊下を中庭へ。

志野　（呼びかけて）あーっ、樹には触らないでください、残すんですから！

桐生は、二階の暗室へ。
生田、アチックの玄関側から帰ってくる。（桐生は目に入らない）

誰もいない集会室に飛び込んで来るなり、全身で喜びを表現。
下手の日本間から着替えて出てきた吉永、生田を見ている。
さらに生田、振り返ると、階段途中から桐生が見ていた。
桐生、にやりと笑うと二階の暗室へ向かう。

吉永　……そろばん知りません？
生田　ああ、

生田、鞄からそろばんを取り出す。二挺。

吉永　持ってんですか？なんで二挺？！
生田　あった。
吉永　あったじゃないですよ。……あーあ！俺も身体動かしてー。ゆうべからずっと根詰めてました。――中庭！手伝いに行きますか。
生田　日に当たるの嫌なんだよ。
吉永　は。
生田　あと爪の間に土が入るのは嫌だ。
吉永　生田さん。よくそれで民俗学来ましたね。
生田　土いじりと学問は話が別だろ？柳田先生だって大抵は書斎を出ずに書いてるさ。それより、どう思う、大陸！
吉永　なんですいきなり。
生田　噂を聞いた。今度、満州の建国大学に移られる工藤教授が、助手も一緒に連れてくらしい。しかも我らアチックに関心を示してるって。
吉永　へえ？
生田　大陸なんて舞台が目の前に開けちゃ、魚の方言も色褪せてこないか？
吉永　でもこれは先生が。幾晩も徹夜で、
生田　分かってる分かってる。けどさ。五千キロに及ぶ国境線！大陸という海の、満州という楔を踏みしめれば僕たちは我が国の文化の源流を掴まえられる。未知なる民族と出会える。僻地にいる少数民族だって――アイヌとの比較、騎馬民族と稲作民族の違い、風習、儀礼、そこにどんな原型が眠っているか。興味あるだろ？
吉永　そりゃあ。満州に拠点を移せば、なんでも――手始めに俺は麦と米の栽培方法の変化を調べます。肥料の変遷、比較、
生田　僕らは感謝するべきなんだ。今この時代に研究者として居合わせたことを！
比留間（声）　失礼します。こんにちはー。アチック・ミューゼアムはこちらでしょうかー？
生田　客だ。工藤教授かもしれない。

生田、飛び出していく。吉永、机の上のものを片付ける。
桐生、二階から顔を出す。

桐生　誰か来たか？
吉永　ええ今、
生田（声）　とにかくこちらへ。

比留間、入ってくる。

比留間　どうも。
桐生・吉永　（それぞれに挨拶）
比留間　先生はいらっしゃいますか。
桐生　わざわざお越し頂いて恐縮ですが、渋沢先生は夜にならないとこちらには。
吉永　伝言をお預かりしましょうか。
比留間　いえ。渋沢先生ではありません。宮本先生に。
吉永　宮本先生？こちらにそういう先生は。
生田　――宮本常一のことですか？
比留間　ええ。
吉永・生田　……、
桐生　でしたら。今日旅から戻る予定でして。まもなくだと思うんですが。
比留間　待たせてもらっても？
桐生　ええ、椅子を。
吉永　こちらどうぞ。
比留間　すいませんね。お忙しいところ。――皆さんは？宮本先生と？
桐生　ええ。そうですね。ともに研究をしております。あなたは、その、
比留間　比留間といいます。
吉永　常さんとは、いえ、宮本先生とはどちらで？
比留間　先日、南九州でお会いしましてね。お若いのに、かなり精力的に土地の者から聞き出しておられて。これはちょっと直接伺いたいと。なかなか優秀な先生のようですな？
桐生　ええ！実績からいえば、この研究所のどの研究者たちよりも立派です。この四年の間で本も三冊、輪転機が空くのを待っている草稿も山ほどある。私なんぞ足下にも及びません。
比留間　あなたは何を？
桐生　私の専門は、喜界島に奄美、南西諸島の文化や方言を。
比留間　そうですか。南西諸島……。ここの方々は皆さん、そういったことを？
吉永　まあそれぞれです。最初の頃は一丸となってひとつのテーマを追っていまし

たが今は。やはり専門性も帯びてきますのでね、
比留間　いや面白い。渋沢敬三さんのお膝元にそんな研究者達がいらっしゃるとは。
渋沢さんの裏のお顔を拝見しました。
桐生　まさに。世間が知っているのは、第一銀行頭取の渋沢敬三だけですからね。
お待ちの間、写真でもご覧になりますか。ちょうど先日の喜界島のが焼き上
がったところで。
比留間　是非。拝見させていただきたい。

桐生、比留間を伴って二階の暗室へ。

生田　……宮本先生？
吉永　（シッ！）
生田　そう名乗ったのか？
吉永　そういう人じゃないですよ。
生田　人がいいなお前は。よすぎる。――こないだ雑誌の連絡で柳田、折口両先生
のところへ伺ったんだよ。そしたら、先生方の書棚に彼の本があった。送り
つけてんだよ、自分で。
吉永　いいな。俺も、常さんみたいにまとまったものができればな。
生田　理念もなく書き綴るだけなら誰でも出来るんだ。違うか？
常一（声）　ただいまー！精が出ますねえ！

常一、本宅側の廊下から入ってくる。薬売りのようなリュック姿。
中庭の志野とりくに呼びかける。

常一　りくちゃーん。志野さーん。台所！農家からモロコシだのキュウリだの分け
てもろうたんで置いときましたー！それとかみさん連れてきたんで、ええ、
台所で待っちょったら奥様が、――すいません！

常一、集会室に入ってくる。

常一　どうも。只今戻りました。
吉永　すごい格好ですね。浮浪者かと思った！
常一　歩くにはこれが一番ですけ、ほれ、こうもり傘。
吉永　南九州はどうでした？
常一　やー、面白い。面白いちゅうか濃い！この旅でざっと本が三冊は書ける。
生田　――、（収蔵庫に行こうと）
常一　生田さん。前に生田さんが話しちょったミクロネシアの鮫の歯の武器、あれ、

生田　屋久島で似たようなもんを見掛けたんです！
常一　報告書で提出してくれないか。
生田　はい、それはわかっちょりますけど、
読みにくいんだ君のは。箇条書きが崩れてる。柳田先生の調査項目票、あれはどうした？
常一　あれは……どうにも使いにくぅて。
生田　は？！
常一　もちろん、あそこにある項目は全部拾うようにしちょります。でも、あんなふうに質問されたら、誰でも、尋問されちょるみたいな――尻の穴がきゅっとつぼまって、喋りたいことも出てこん。箇条書きも同じです。こっちの頭で勝手に整えて、せっかくのナマモノを別モンにしてしまう気がして、使いやすいかどうか。誰にとって？それを決めるのはこちらだ。
生田　そりゃそうじゃろうけど、
常一　やめましょう今は。常さん、お客が来てます。
吉永　客？
常一　旅先で会ったって――（二階に）桐生さん！常さんが戻りました！
吉永　比留間、桐生よりも早く階段を駆け下りてくる。続いて桐生。

比留間　……、（常一を見る）
常一　あの、
比留間　やあやあ先生。どうもその節は。（常一の手を取って握手）
常一　……どなたです？
桐生・吉永　ん？（生田もやや興味を惹かれる）
比留間　どこかでお会いしましたか。
常一　いやですね先生。水くさい……。思い出してみてくださいよ。会ったじゃないですか！この南九州の旅、先生は最初は鹿児島から船で屋久島、そっからさらに種子島に渡りました。種子島じゃ港近くの宿に泊まりましたよね。
比留間　ほうです。宿の窓から出征する兵隊の見送りで島中の人が絶叫しちょるのを何度も見ました。その間、隣の部屋じゃ女中さんが警察署長にくどかれちょって、なんとも切ない思いをしましたが、……あなた、あのとき隣の部屋に？
常一　違う！それから鹿児島に戻って向こう岸の垂水に渡った。そこからバスで一気に南下して伊座敷へ。
比留間　伊座敷じゃ漁業についての聞き取りをしました。渡沢先生が研究されちょる魚の方言もようけ採集できて――分かった。あなた漁師の、
常一　違う！伊座敷からは、まさか歩いての峠越え、
比留間　畑をみよう思うたんです。あのあたりの山は芋畑が中心で、ひょっとしたら

比留間　稲作民族とは別の民族が大元かもしれんちゅうて。あんた農家の？
常一　いいや！やっとこ先っちょの佐多岬、着いたと思ったら今度は北へ！
あのへんの海岸はいまだに陸路の開発には不自由しちょる。渡り舟を出して
もろうたが、――そうじゃ、確かあなた船におった、
比留間　惜しい！宮崎に入ったら、あんたは一路、山岳地帯に踏み込んだ。馬鹿みた
いに歩いて、
常一　銀鏡（しろみ）神楽の東米良、
比留間　平家落武者伝説の椎葉、
常一　大分、臼杵と歩き通して、
比留間・常一　終点は別府！
吉永　（拍手）
常一　ようご存知で……。
桐生　結局どこで会ったんです。
比留間　最初の鹿児島から屋久島に向かう船、あれで一緒だった。あんたが荷物を置
いて用足しに行ってる間、鞄に詳細な地形図とカメラが入っているのを見た。
それであんたが戻ってくる前に隠れ、それからずっと跡をつけてた！
常一　じゃあ会うてないん？
比留間　会ってはいない！
常一　なんなん、あんた。誰なんです。
吉永　常さんの行程に着いていけるなんて。
比留間　見くびって貰っちゃ困る――こういう者だ。

比留間、懐から、郵便物を出す。それは、アチック宛の郵便物の束。

吉永　郵便屋、
比留間　違う！
生田　待て、封が全部開いてる……、勝手に開けたのか？！
比留間　大日本帝国陸軍憲兵司令部大尉　比留間敦。宮本常一、貴様スパイだろう。
常一　は。わしが……？

比留間、笛を。中庭から、私服に扮した憲兵隊員　茂木入ってくる。
吉永、思わず逃げようとするところ、

茂木　動くな。全員動くな。
比留間　宮本常一。上空からは知り得ない海岸線の地形網羅、また山岳地帯の調査！
目的はなんだ。その情報をどうする気だ……。

常一　――どうもこうも、
比留間　カメラを接収する。
常一　でも、撮っちょるのは洗濯物だの背負子（しょいこ）だの、そんなもんばっかりです。
比留間　１００のクズの中に１の目的を紛れ込ませる煙幕だろう。
桐生　いま上で俺の写真を見せたろう？常さんが撮る写真は、確実に、俺の以上につまらん。だがあんたも理解を深めんと、国力増強に繋がる知識を一つ失うことになる。
比留間　どういう意味だ。
桐生　この宮本常一は、満州建国大学に工藤教授の助手として赴任することが打診されている。教授たっての希望だ。
比留間／生田　なにっ、／（生田、声には出せないが衝撃）
桐生　今日、工藤教授から話を聞いた。彼の調査能力、洞察力は満州経営の礎（いしずえ）に欠かせないと仰った。あんたが嫌疑を掛けているのはそういう男だ。
比留間　だが――それは正体を暴けば。とにかくカメラを、（茂木に指示）

敬三、渡り廊下をアチック玄関側から来る。

敬三　そこまでにしてもらいましょうか。
比留間　これは。渡沢さん。お早いお戻りだ。

敬三、常一の手からカメラを取り、比留間に渡す。

敬三　見慣れん車が停まってるから何かと思えば。今日のところはこれを持って引揚げていただきたい。不足ならどこにでも出頭する。私も一緒に。
比留間　――っ、
敬三　今日これ以上踏み込むのなら、こちらにも考えがある。懇意にしているお方が陸軍上層部にいる。話をしてもいいんだが。

比留間、郵便の束を敬三に突き付ける。

比留間　渡沢敬三。世間を欺いて何をしているんだか。――「アチック・ミューゼアム」！立派な敵性語だ。あなたの命名だそうだが。今後一切、この名において、ここへの郵便物、送金は決して届かない。そう思っていただきたい。

比留間、ノートを取り上げると茂木に渡す。二人、出て行く。

敬三　……名前を変えなきゃいかんな。
吉永　先生、
敬三　心配するな。尤も、歩きにくい世の中になるのは確かだがなぁ。
生田　それより先生、先ほど桐生さんから伺いましたが満州建国大学の件、
敬三　ああ、
生田　宮本さんに決まったというのは本当ですか。
敬三　工藤さんから話は聞いてる。
桐生　常さんにも直接電報で打診したと。
常一　はい。大阪の家で家内が受け取っておりました。明日にでも工藤教授にご挨拶を。
敬三　それについて話がある。まあ、あとで二人で。
常一　はい、
生田　――っ、

生田、収蔵庫へ行く。
渡り廊下を本宅側から誉子と真木が来る。

誉子　失礼いたします。旦那様、――やっぱりいらした。
敬三　ああ、
誉子　どうぞお入りになって。――こちら、宮本さんの奥様の真木様。お帰りをお待ちくださっていたのよ。
真木　……失礼いたします。

誉子、真木を集会室に招き入れる。真木、緊張しながらも入る。
誉子は美しい着物を着ているが、真木はもんぺ姿。

真木　あの――はじめまして。
敬三　大阪からだね。遠いところわざわざ。あとで夕食をご一緒しましょう。ゆっくりしたお話はまたその時に。
真木　奥様もそう言うてくれはりました。けどうちが、いえ、私が、どうしてもそれまでよう待てませんので。一言だけ、先生にイの一番にお詫びを……、
敬三　詫び？
真木　四年前にこの人がアチックに入る言うた時、私は猛反対してました。せやけどこの人が大学に呼ばれるやなんて。うち、この人が新しい学問やて言うてたこと、全然分からんかったんです……。これも全部、先生のおかげです。
桐生　まあ、……常さんの話は、常さんの努力あってのことですから。

吉永　そうです。顔を。ねえ先生、
敬三　……、
吉永　先生？
敬三　真木さん。
真木　はい、
敬三　宮本くんも。本当は今日、宮本くんと二人きりでゆっくり話すつもりだった。こんな伝え方になって悪いが――その話なら、先ほどお断りした。
桐生・吉永　（それぞれに）断った？！

生田、収蔵庫で話を聞き、やがて出てくる。

常一　先生、断ったちゅうのは、その、
敬三　そうだ。宮本くんを今、外に出す気はない。
桐生　それはその――常さんには、
常一　ほうです――お断りになるなら、せめて一言、
敬三　手順前後になって申し訳ない。
真木　待ってください。それは、……もう決まったっていうことですか？
敬三　アチックからの正式回答として伝えました。
真木　そんな……おかしいやん。（常一に）あんた、今からそのなんとかいう先生のとこへ行ったら？頭下げて、な？
常一　真木、
真木　けど――なんでそんな大事なこと先生が勝手に決められますのん？先生にとってはたいしたことやないかもしれませんけど――先生はうちみたいな暮らし、知ってはりますか？他人に頭下げて金借りるなんて、したことあらへんねやろ？
常一　やめえ！
真木　先生、お願いします。考え直したって。
敬三　決めたことです。
真木　せやからそれを先生が決めるんは、あんまりやないですか……！

誉子、敬三の前に出て、真木に頭を下げる。

誉子　真木様。申し訳ございません。宮本さんも。
常一　奥様……やめてください、
誉子　これだけは申し上げたくて。主人は、この研究所を、ここにいる研究者の皆さまを、深く大切にしております。ここから何人の博士が誕生するか、そればかり。――今度のこと、主人にはおそらく何か考えがあってのこと。主人

真木　を責めるのは、どうかそれを聞いてからにしてくださいませんか。
誉子　いやや！……聞きたないです。納得なんてしたない。悔やみきれへんのに。本当にそうお思いですか。ご自分のご主人がここまでと。この四年、苦しい思いをしながらも耐えられたのは、この先に何かある、そう思っていらしたからではありませんか？この先を、本当にもう信じることができませんか？
真木　……ほんなら教えてください。だってうち知らんのに。――そんな大きな夢の見方、いっぺんも教わったことないのに……！
常一　真木。
真木　ほんまは、あんたが見てるもんかて、うちには見えへん。こんなガラクタ。あんたとおんなじもん見ることかてできひんのや。
誉子　――私もです。私も、この人が見てる景色は。
真木　……、
誉子　一緒に住んでいても、この人はほとんどの時間をここで過ごします。私の夫として、子供達の父として過ごすのは、ほんの僅かなひとときだけ。顔を見るのもやっとなら、いっそ離れて住んでいる方が楽ではないかと思います。
真木　……奥様、
誉子　恨み言をぶつければ、あるいは変わっていただけるのかもしれません。けれど真木様、その程度のお仕事のために傷ついてきたかと思うとそれも悔しい。
真木　……（頷く）、
誉子　お茶でも飲みませんか。あちらで。

誉子、真木を連れて出て行く。

敬三　いたたた。耳が痛い。我らは所詮、砂場で遊ぶ子供だな。
吉永　……先生、
桐生　それで理由は、
敬三　んー、
桐生　常さんを断った理由はなんですか？
敬三　宮本くんの学歴では満州へ行っても決して条件は良くない。それよりは、今、日本を一通り見て歩いておくと、それが実績になって学歴以上の物を言う。
常一　……そう、ですか。学歴……、（椅子に座る）
桐生・吉永　――。（目を見交わす）
生田　先生、替わりに誰を。宮本さんの替わりには、一体誰を推薦したのですか？
敬三　――誰も。このアチックからは誰も。そう言った。
生田　工藤教授はどなたか他に心当たりがあるようでしたか。
敬三　さあ。立ち入って聞きはしなかった。

生田、バッと鞄をつかむと集会室を走り出す。玄関側へ出て行く。

吉永　生田さん！
桐生　待てよ！
敬三　いい。気が済まないんだろう。
吉永　でも先生、
林（声）　なんだよ、どこ行くんだー？
常一　――ッ、

林、集会室に顔を出す。農作業中の格好で農具を持っている。

林　おい！常さん。吉永も！帰ってきてんなら手伝え！本職だろ？常さん。手伝わんと襟の中にミミズ入れてやる。
吉永　（農具を奪い）行きます。やります！めっちゃくちゃに動きたいんで。
林　なんだよ、なら早く来いよ。
桐生　俺も行く。
林　いいよ、桐生さんは。
桐生　無理はしない。外の空気吸いたいんだ。

桐生、吉永、林について出て行く。

敬三　宮本くん。
常一　……、
敬三　宮本くん。
常一　――はい、
敬三　満州は、わからんよ。
常一　……え？
敬三　僕にはどうも夢の王道楽土とは思えん。満州の資源館も見た。博物館だ。石炭、鉄鋼、満州の豊潤な資源が陳列室できらきら輝いていた。誰の目にも、満州の黒土が同じように光って見えるんだろう。だが盧溝橋、ノモンハン、人が死に過ぎている。

敬三、魚方言の地図を見る。

敬三　宮本くん、魚の方言、全部でもう一二〇〇〇は拾えたろう。ただ伊豆の海で一匹釣ってみたところから、誰がこんなスペクタクルを予想した？
常一　満州という海に釣り糸を垂らす、何が見えるんですか。

敬三　ヒトラーがポーランドを狙っている。ヨーロッパの火種が大陸を焼く。三国同盟。日本も巻き込まれる。いや自ら身を焼きにいく。僕はヨーロッパに四年いたが、正直、国力が違う。気付いたときにはもう引き返せない。気付いたときには――日本人の半数が死に絶える。

常一　なにを、

敬三　夢想だよ。悪夢の方の。

常一　でも、可能性はなくはない。

敬三　……僕は、たとえそうなったとしても、もう一度日本をはじめられるようにきみのような男を今のうちに育てておきたいと思っている。まだこの国があるうちに、この国のありのままを、ひとりの人間の目で見ておく。それでしか、とどめておけない。

常一　ですが――万一そうなったとして。器になれちゅうんですか？わしに。日本をここにとどめろと？買いかぶりすぎです。

敬三　……時間はないよ。おそらく、そうは残されていない。

中庭から活気ある笑い声が聞こえてくる。
日没の光が部屋の中に充ちている。

常一　南九州のまとめが終わったら、すぐに発ちます。歩いて来ます。わしに出来るか、――歩くことしかできませんけど、とにかく、ありのまま、この国の姿を止めているところを、

敬三　ありのまま、常に在る。――常民、

常一　え？

敬三　常の民と書いて、常民――アチック・ミューゼアムに替わる名前だ。ここは名も無き普通の人々の暮らし、日本の根っ子にある文化を研究する場所だ。日本常民研究所、どうだろう？

常一　でしたら、文化を足したらどうでしょう。日本常民文化研究所。

敬三　ああ。いいな。――ここが、どれだけの仕事ができるか。これからなんだ。

常一　はい。

吉永（声）　先生！

吉永、農具を持って飛び込んでくる。

吉永　二七九五！――お伝えするのを忘れてました。先生が戻られる前にって夜通し数えてたんです。メダカの方言！メダカ一匹だけで二七九五です！

敬三　……吉永～！！

敬三、犬を可愛がるように吉永を。農具も奪う。

敬三　よし。僕もやろう。言い出しっぺは僕だからな。
吉永　ちょっ……、大丈夫ですか先生?！
敬三　舐めるな。渋沢家は農民の出だ。お祖父さんは農民から一代で身を立てた。
僕には農民の血が流れてるんだよ。

敬三・吉永、出ていく。渡り廊下を中庭へ。

敬三（声）　宮本くん、外。いい夕焼けだ。
常一　――空の端から燃えていくようじゃ。

溶暗。

第六場

常一、リュックを背負い、ひとり立つ。
中国地方脊梁山脈の山中。峠の手前。
藪の中、人ひとりがようやく通れるほどの道を来た。
峠の上から田川松太郎、背負子に柴を背負って歩いてくる。

常一　よお。爺さん、ここいらは島根かの。広島かの。
松太郎　峠を越えるまでは島根じゃが……見らん顔じゃな。
常一　よその者じゃ。
松太郎　よその者っつうのはどこの者じゃ。
常一　瀬戸内の大島の百姓じゃ。
松太郎　ほう。大島のもんがこげなところで何しちょる……、
常一　話きかせてもらおう思うて、あちこち歩いとるんじゃ。
松太郎　話？
常一　それより爺さん、登ってくる途中この辺の田んぼ見とったんじゃが、どうしたん?稲が寝とるの。
松太郎　菌が出よっての……、
常一　菌核病か。消毒はしとるんか。
松太郎　消毒いうても石灰を入れるくらいしか出来んわ。
常一　そいじゃあとても防げんじゃろ。鉄分が足りんくなって起こっちょるんじゃろうから、赤土を田んぼの中に入れたらどうじゃ。
松太郎　赤土はこの辺りじゃ見掛けん。どっから運んできたらええか見当もつかん。

常一　ほんだらの、こういう話がある。大阪の藤井寺っちゅうところ、そこを歩いたときも、稲が同じように寝ちょった。赤土もないし、どうしたらええんかずーっと考えて、土が赤いのは鉄分、牛の血が赤いのも、

松太郎　牛の血を入れたんか！田んぼに。

常一　（頷く）

松太郎　試してみるのもええかもしれんな。あんた、ずいぶんと役に立つこと知っちょるのう。もっとなんか知っちょらんか。

常一　そりゃあいろいろあるが。爺さん、今晩、泊めてもらえんかいのう？

松太郎　ええが。こげなとこで会うたのも縁じゃ。泊まれ。なんもねえが。

常一　爺さんもなんか昔のことを聞かしてくれん？

松太郎　昔っつうのはなんじゃ。

常一　なんでも。村のこと、爺さんのことでもええ。

松太郎　そげなら凄い話をひとつ。

常一　おお、

松太郎　親父の話だ、わしの。あんた、大島いうたろ？わしの親父も海沿いに住んどったんじゃ。

常一　漁師をやっとったんか？

松太郎　そげだ。御一新のあとで、これからはもう誰でも、どこに行ってもええ、そういう頃じゃ。村長に地図を見せられてな、海のとこに赤い線が引いちょって、この線までは自由に出て、いくら釣ってもええんじゃって教えられちょって丸木舟で漕ぎ出した。線を見たら帰ってこようちゅうて軽い気持ちで行ったんじゃ。だあも、いくら行っても海のどこにも赤い線は引かれちょらん、ほんで親父はどんどん行って、まずは壱岐つうとこまで着いた。そのへんじゃブリがよう釣れての、見るとまだまだ島影がある、あそこは何じゃと壱岐の者に聞いたら、

常一・松太郎　対馬！

松太郎　じゃという。ほんだら対馬まで行こういうて、舟を漕いでった。対馬に着いたらまだ向こうに島影がある。あそこは何じゃ、あそこも釣れるか？釣れるなんてもんじゃない、たまげてしまうでいうて、

常一　朝鮮まで行ったか。

松太郎　おお。次の島、次の岬と漕いでった。どこまで行っても終わりがこらん。そのうちリャオ川つうとこに行き着いてな、

常一　そりゃもう中国じゃろう！

松太郎　その河口に日本人がおってな、あんたどっから来た、島根からじゃいうたらもう驚（おべて）いて。親父がこのままずっと行ったらどこへ着く？と聞いたら、イン

ドへ着く、ほげしたらインドまで行こうちゅうたけど、悪いことは言わん、その舟で来れるんはここいらまでが限度、引き返せて諭されてな、親父はそっから引き返してきた。村に帰るとな、五年が経っちょった。

常一　そりゃあ死んだと思われちょったろう！

松太郎　おお。親父、笑うちょったわ。浦島太郎はきっと朝鮮に行ったんじゃな。食うに困らんしどこへ行ってももてなされるし、竜宮城つうのはあそこじゃろ、ちゅうてな。そのうちかみさんも貰うし、わしみたいなガキもできるし、それきり遠出はできんかったが――死ぬまで言っちょった。いつかまた今度はもっとでかい舟で行く。インドまで漕いで行くんじゃ――、

常一　……わしの親父も、若い頃フィジーに出稼ぎに行った。あっちでひどい病気がはやって、すぐ一文無しで戻って来たが。学校なんてなんも出とらんのに、よう物を知っちょった。家の裏に、白木山ちゅう山があっての、てっぺんからは、海と、島が幾つも幾つも重なっとるのが見える。海の道を漕ぎ出していけば、この世界どこへでも行ける――親父はわしに、ひとっつずつ島の名前を教えてくれた。あの島にもきっと人が居る。わしは親父が指さすその先に、いつか全部行くんじゃと思うちょった……、

松太郎　夜通し喋るか、今夜は。酒もあるで。

常一　ああ。――その前に、上の峠まで行ってきたいんじゃ。峠までいきゃあ、村が全部見渡せるじゃろうが。

松太郎　面白い景色じゃねえが。風だけは、いつもいい風が吹いちょるが。ほんならあとで来い。村に降りて松太郎の家はどこじゃと聞けばすぐに分かる。

常一　分かった。爺さんは松太郎ちゅうんか。

松太郎　おお。

常一　わしは宮本常一じゃ。

松太郎　常さぁか。

常一　行ってくる。――じいさん、ありがとう！

松太郎、峠を下りていく。

常一、ひとり峠を上がっていく。歩き続ける。

過去から未来。ここ。それから、ここでない場所――、

常一と語った一人一人の名もなき人々が峠をともに歩いていく。

馬喰　「あんたはどこかな？はァ長州か、長州かな、そうかなァ、長州人はこのあたりへはえっときておった。長州人は昔からよう稼いだもんじゃ……、」

漁師　「……へえ、ようここまで来んさったのう……、わしも久しう久賀へもいんでみんが、久賀もずいぶん変わんさっつろのう、」

農婦１　「サァ、この村が大きく変わり始めたというのは、やっぱり道ができはじめ

てからではなかっただろうかの？あの頃のことは、」

馬喰　「あんたもよっぽど酔狂者じゃ。乞食の話を聞きに来るとはのう……、」

農婦２　「この頃は田の神さまも面白うなかろうのう。みんなモンペをはいて田植するようになったで。」

漁師　「それがどうしてここへ来たちうか。それはな、久賀にはメシモライというて、まァ五つ六つくらいのみなし子を、」

農婦１　「ほうです、四国まいりの道中、伊予の山の中では娘をもろうてくれんかと言われて、何をさせて使うてもかまわん、」

漁師　「火薬を手に入れて、入り江の石を一つずつ割る。その石を漁船に吊り下げては、一つずつ沖の方へ持ってって捨ててていった。そうやって港を、」

農婦２　「そうといの、モンペをはかずに腰巻だけじゃと田の神さまがニンマリニンマリして手伝うてくれるんじゃ、」

馬喰　「それにはの、歌をうたうのだ。歌っておれば、同じ山の中にいるものならその声を聞く。同じ村の者なら、あれは誰だと分かる。相手も歌をうたう。」

漁師　「らくにできたというてもいまのようになるまでには三〇年もかかったじゃろうか、」

常一　常一、眼下を見渡す。

そこには、村の営み、一人一人すっくと立つ名も無き人々。

仄かに光を帯びる人々の影が、重なり合う島影のように浮かぶ。

列島が、発光する。

光を影が浸食していくように――日本が第二次世界大戦に参戦したのを告げるラジオ、「ニイタカヤマノボレ」と打電する暗号通信、遠く地響きのように飛行音・真珠湾への爆弾投下・爆撃音等が響く。人々の内包する光は、ぎりぎりまで発光し、やがて闇に溶ける。

〈一幕　了〉

第七場

昭和一七年（１９４２年）五月下旬。夕闇～夜。

「日本常民文化研究所」集会室。

見える場所にあった民具もまとめられている。史料整理の名残。

屋敷の近くで町内会の人たちが歌う「愛国行進曲」がうっすらと。

敬三、机の隅で、トランプのカードを並べている。

常一、玄関から入ってくるが、敬三の姿に胸を衝かれて立ち尽くす。

敬三　宮本くん、
常一　ただいま戻りました。
敬三　連絡をくれれば迎えに行かせたのに。
常一　そんな。東京駅からの市電が格別なんです。ああ東京に帰ってきた……ちゅうて。町内会の演習と行き会うたんで混じってきました。坂の下の木蓮、蕾が膨らんじょりましたね。
敬三　木蓮？
常一　ええ。
敬三　……そうか。忘れていた。
常一　ご報告がたくさんあります。播磨も能登半島も、変わらずまだ漁をしちょりました。釣針にテグスも面白い調査ができたんで、先生、今夜お時間は、報告は明日聞こう。悪いね。
敬三　いえ……。——みんなは？
常一　朝から保谷に出かけたよ。さすがにもう戻る頃だと思うが。
敬三　保谷？新しい調査で？
常一　倉庫を見つけてね。今のうちにここの民具を整理しとこうと。
敬三　道理ですっきりしちょって——では自分も明日さっそく、
常一　……、
敬三　先生？
常一　ん？
敬三　……お加減でも？
常一　いや。遊んでいるだけだよ。

常一、荷物を降ろす。敬三の向かいに座る。

敬三　最初は、こんな——子供の玩具だった。
常一　——、
敬三　アチックの始まり。大学の同級生と博物館の真似事をな。郷土土産にもなってるような玩具をあちこちから集めてね。同じダルマでも比べてみたら何か文化が伝わる法則でも見いだせるんじゃないかって夢中になったが……あの頃の僕らには結局何も掴めなかった。
常一　……ええ。今もまだ途中ですが。
敬三　途中だ。ほんの少しのことを掴んでは、却ってその後ろに、分からない沢山のことが横たわっているのを見つける。——あと五年、時間があればな。
常一　……先生？——本当にどうかなさったんですか。今日は。
敬三　……宮本くん。僕はね、お祖父さんを裏切った。
常一　え、

敬三　あの人は一生を賭けて官に背を向け、野に在ること、民間の旗印としての第一銀行を立ち上げた。なのに僕は売り渡したんだ、渋沢の魂を……、

常一　――先生、

桐生　常さん？戻ったんだな。

桐生、二階の階段に出てくる。前景から変わったその姿。
深い病に冒されていることが分かる。

常一　……桐生さんっ、

敬三　うるさかったかい？起こして悪かったね。（トランプを片付ける）

桐生　いえ。ちょうど目が覚めたところです。――お帰り、常さん。

常一　……退院されたと聞いて安心していましたが、

桐生　入院中に体重が落ちただけだ。見掛けよりはずっと元気なんだよ。

桐生、手を離して階段を下りてこようとするところをよろめく。

常一　無理は禁物です。肺は治ったと見せかけて菌が寝とりますから。わしも肺浸潤と言われた時には起き上がれるまで二年も掛かりました。

桐生　それがこんなに歩くようになるんだからね。――俺もすぐだ。

常一　はい。

桐生　先生、昼寝をしたら気分が良くなりました。（常一、桐生が階段を下りてくるのを支える）今のうちに所蔵番号の整理、終わらせてしまいます。

敬三　だめだ。もうすぐみんなが戻ってくるから頼んでおくよ。きみは、もう少し寝てなさい。

桐生　あいつらには任せておけないんです。林も吉永も細かいことは。資料が移動中に一つでも欠けたら、所蔵担当の名折れですからね。

敬三　分かった。じゃあ少しだけだぞ。なにか飲み物を用意させるから。

桐生　でしたら、――日本酒を熱燗で。

敬三　コラ。

敬三、立って行こうとする。と、中庭から人の騒ぎ。

志野（声）　離しなさい！

りく（声）　（悲鳴）志野さんッ！志野さん危ないっ！

敬三・常一、玄関へ出て行く。

敬三（声）　志野！？――おい、そこにいるのは誰だ！

敬三・常一、志野を支えて戻ってくる。志野は怪我を負っている。
後ろからりく、野菜を取ろうとした籠を持って来る。
りく、籠を置くと、集会室脇の日本間へ消毒を取りに。

常一　志野さん、大丈夫ですか？！（椅子へ）
志野　ごめんなさい、たいしたことは。旦那様すみません、取り逃がしました。
敬三　志野、きみは――何をやっているんだ！
志野　申し訳ありません……生け垣に穴が掘られておりました。たぶんそこから忍び込んで、
敬三　たかが野菜、くれてやればいいだろう。取られたらまた育てればいい。どっちが大事だと、
志野　ですが旦那様が仰るように、そのうち本当に配給が足りなくなるとしたら、
敬三　馬鹿！どうでもいいんだ、そんなことは。飢えるときは皆で飢えれば、
りく　失礼いたします、

りく、志野の元に消毒などを持って来る。手当をはじめる。

常一　――先生、これからは交代で屋敷の警備に立ちます。
桐生　そうだな。いざというときの人員配置も決めたら。
りく　あれです、みんなで呼子を下げて。焼夷弾もすぐに見つければ消し止められますって。私、訓練で誉められました。
敬三　やめてくれないか！
常一・桐生・りく　――、
敬三　よしてくれ。これから先は僕への――渋沢への忠義はどうでもいい。こんなものに命を賭ける値打ちはない、
志野　そうは仰いましても旦那様、家を――家族を守りますのに理由がいりますか？
敬三　……家族、
志野　おこがましいことを申しまして、
敬三　いや。……無茶はしないでくれ、頼むから。
志野　旦那様……？

集会室に、林・吉永・かつらが入ってくる。

かつら　ただいま戻りました！あーつっかれたァ。

林　（爆笑）ぶひゃひゃひゃ、これからお前あれな、ナメクジとそう呼んでやる。
吉永　ちょっ――腰抜けまでは分かりますけど、ナメクジじゃ。背骨もないじゃないですか！
敬三　お帰り。
常一　お帰りなさい！お疲れさまです。
林　よおー常さん！そっちもお帰り！
かつら　（桐生に）あんた大丈夫なん？起きたりして。
桐生　ああ。
敬三　どうだった。保谷は。
吉永　とにかく量が量ですからね。とりあえず運んで降ろしただけで精一杯です。整理まではとても。
林　それより行きも帰りも検問に引っかかりました！
常一　問題ないでしょう、民具を運んでるだけなんですから、
林　だろう？なのにこいつが。いかにも疑いたくなるような素振りすんだよ！冷や汗だらだら出しちゃってよ！
吉永　条件反射です。あの制服が醸し出す、なんといいますか、
桐生　それで物は？ちゃんと運べたのか？
かつら　それはちゃんと！なんにも欠けてへんで！な。
林・吉永　（欠けてません）
桐生　……、
かつら　んもう。信用してぇな！
志野　まあなんにせよご無事で。りく、
りく　はい。お疲れさまでした。皆さまにお茶をお持ちいたします。
かつら　うちコブ茶！
生田（声）　こんばんは。失礼します。
吉永　誰か、

りく、玄関先に出て行く。志野、消毒薬を片付ける。
林・吉永、荷物を降ろす。かつら、桐生に膝掛けなどを。

りく（声）　生田さん、
一同　（それぞれに反応）
りく　とにかくどうぞ。

りくに続いて入ってくる生田。前景とは違う格上の背広姿。
続いて陸軍の制服に身を包んだ比留間と茂木。

林　生田……、
生田　ご無沙汰しております。
林　てめえ。どの面下げて。あれだけ世話になっておきながら書き置き一枚で。
敬三　林くん。――元気そうじゃないか。生田君。
生田　渋沢先生。その節は、大変ご無礼いたしました。
敬三　研究は続けてるのか。
生田　おかげさまで。ただいま設立を進めております新しい研究機関、そこの主任研究員として所属することが決まりました。
敬三　ほう。出世だね。おめでとう。
生田　先生にも一言お祝いを申し述べたく参じた次第で。比留間さん、
比留間　渋沢先生。日本銀行副総裁就任、おめでとうございます。
茂木　おめでとうございます。
常一　……日銀？
志野　旦那様、
敬三　……今日、総理官邸に呼び出された。東條英機から直々に。断った。何度も何度も。だが東條がサーベルをガチャつかせて迫ってきた。
比留間　総理とお呼びください。
敬三　頷くしかなかった。強姦された気分だ。
比留間　なんて言い様ですか。この先には日銀総裁の椅子も待っているというのに。
敬三　言いなりになって金を――この国をドロ沼に嵌める金を吐き出す椅子か。誰でもいい、そこに座るのは。
比留間　ご謙遜を。渋沢栄一翁の直系！先生は立派に、神棚にまつれるお方です。今この時、先生以外に適任は。
敬三　やめろ、
比留間　これであなたは金融界の元帥となることが保証された。
敬三　そんなものに何の値打ちがある？――僕が引き受けるのはただ……常民、名もなき人たちと――ここにいる家族、そのためだけだ。帰ってくれないか。
比留間　本題はこれからです、
りく　お引き取りを。聞こえませんでしたか。旦那様は帰れと。玄関までご案内いたします。
生田　（笑う）見違えた。りくちゃん、ずいぶん貫禄が出てきたね。
りく　ありがとうございます。ですが、変わられたのは、私よりあなたでしょう。
生田　心外だ。俺は何も変わっちゃいない。あの頃も今も。ただ学問のことだけを考えている。
林　ほざくな、
かつら　そうや。恩に泥塗る奴が偉そうなこと言うな！
生田　本当に時流を読み、この学問の地位向上に動いているのは誰か？――先生、

常一　差し出がましいようですが、この研究所どうなさるおつもりですか。
比留間　どういう意味です、
日銀副総裁就任の暁には、第一銀行だけじゃない、先生がお就きになっていたあらゆる民間会社の役職をすべて辞任されることになる。この研究所の運転資金はそこから出ていたと聞いたが？
敬三　――、
生田　それでなくても一介の研究者が自由に動き調査することは、もう無理でしょう。宮本さんが次にスパイと間違えられても、いつかのように笑い話ではすみません。――この研究所、存続は難しいのではありませんか？

常一、生田に詰め寄る。

生田　ウ、
常一　生田さんそれだけは。あんた、言うてええことと悪いことがあるでしょう？

比留間、茂木に指示。茂木、常一を殴る。

りく／吉永　宮本さん！／常さん、
比留間　黙って聞け！
常一　黙らん！じゃけえなんじゃ？先生のお金に頼らんでも日本常民文化研究所、今だからこそ休むわけにはいけん、調査研究も漁民資料の編纂も途中じゃ。戦争なんてもんに惑わされてはいけん、それが、
敬三　宮本くん。……君の言うとおりだ、生田君。僕には研究活動を支える収入がなくなる。何よりこれからの調査旅行には、命の危険が伴うようになる……。
常一　そんなもん自分は怖れません、
敬三　僕が怖れる！……話すつもりだったよ。この旅行を最後にしばらく調査は控えろと。今の僕は君を――君たちを喪いたくない、生き延びさせることを考えたい。
常一　先生……、
敬三　潮時だ。
常一　でもやることはなんぼでも！（吉永らに）のお！
吉永・林・桐生　――、
生田　俺は、誘いに来たんです。今度新たに文部省が監督する「民族研究所」が創設される。
桐生　文部省――国の直属……？！
比留間　「民族研究所」所員は、軍部とともに、我が国の国策遂行に関係する諸民族の調査を行い、国の民族政策に寄与せんとするものである。無論、宿敵米英

生田　諸民族の構造および性格も、この新設機関の主要研究対象となる。
　大東亜共栄圏の確立に、今こそ民俗学者の力が――俺たちの力が必要だと国が動いたんだ。俺たちが表舞台に立つときが来たんだよ。
林　表舞台？大袈裟な……、（笑おうとするがうまくいかず）
生田　一緒に来ないか？
敬三　生田君、
生田　先生は口出ししないでいただけますか。俺は一人一人に訊いてるんです。
全員　――、
吉永　……帰ってもらえませんか。

吉永、荷物から帳面を取り出し、作業を始める。

吉永　すいません。俺たち、これやっちまわないと。運んだ資料、どこに何置いたか書いたんですけど汚いから……、
生田　真面目に聞け。そうやって耳を塞ぐのか？戦いの声からも、
吉永　――、
生田　民具の研究が大事じゃないとは言わない、でも今やることなのか？！それが――考えろ！
吉永　――、（作業し続ける）
茂木　やめろ、（ノートを奪う）
吉永　離せ！――考えてるよ！だから耳塞ぐんだよ！……俺は俺、ここにいることに誇りを持ってます。先生のことを心の底から尊敬してます。でも――大学の同期が一人減っていく度、どんどん眠れなくなるんです。民具が、ガラクタに見える瞬間があるんです……！
常一　おい、
林　考えるよな……嫌でも……、
常一　林さん、
林　鉄砲を持った方が国のためになるんじゃないか？工場へ行って汗を流した方が、よっぽど役に立つんじゃないか？
常一　わしらがそれを言ってどうする？他の誰に分からんくなってもわしらだけは、
林　価値観は揺るがない。そうだな。だが窓を開ければ万歳三唱。耳の底に残ってる祭囃子も掻き消されていく……！常さんこそ迷いはないのか？一欠片も？あんたが歩き回る中で、後ろめたさが全くないって胸を張って言えるか？
常一　……、
林　ここにいる間はいい。でも一人になると。

吉永・桐生　――、
生田　力を尽くしたいんだ。俺たちは。

生田、本や民具などを使って、いびつな六角形を作る。

生田　満州。インド。ミクロネシア。ニューギニア。ミッドウェー。アッツ、

中心にある机に手を。

生田　そして日本。――今築かれつつある大東亜共栄圏、これ全部が俺たちの研究対象になるんだ。研究を続けながら国の役に立つ。これ以上の道が俺たちにあるか？必要とされてるんだ、多種多様な民族を国が――日本が率いていくために！

林　……現地の民族調査、

生田　そうだ。彼らの宗教、風俗、性格を把握し、尊重した上で我が国に協力するよう橋渡しする。

吉永　――食料調査、

比留間　それから資材。現地での調達がまかなえれば、日本から現地までの長大な補給路を確保する必要がなくなる。その分兵力を前線に割ける。

桐生　心の……掌握、

比留間　民族の利害を把握すれば、我が軍が支援することで共に戦える。

生田　満州の研究チームは、北方のオロチョン族に武器を支給したそうだよ。狩りが得意な彼らを狙撃兵として育て、対ソ連への共同戦線を張る！

比留間　インドの少数民族に一個小隊を紛れ込ませ、反乱を起こさせる。的確に時期を計れば、インドの国境警備が崩れることになるだろう。

林　現地での調査にゆるされる時間は、

比留間　上陸後およそ二週間。

林　そんな時間で、

比留間　速さが勝負だ。共栄圏の拡大は日本国土を守るための最大の防御壁となる。

かつら　待ってぇや！――ほんなら戦うんか、あんたも。

生田　戦うのは軍だ。

かつら　ほんで？！戦いは見とったらええんか？一段落した頃に死骸跨いでいって「ほな、すんません」言うて聞き取り調査したらええんか？！

生田　そうだ。

かつら　――胸くそ悪っ、虫酸が走るわ。

生田　なんとでも。重要なのは、今この時、学問に最も自由な権利が与えられる場所はどこか？――分かっていて躊躇するなら、学者と名乗る資格はない、

志野　やめてください！――たくさんです、

志野、生田が並べた線を壊す。

志野　たくさんです、軍人も学者も……！ここに物を置く、線が出来る、――それでどれだけの人が死ぬんです？！現地の人たちだけじゃありません、この線を一センチ動かすためにどれだけ……！

敬三　志野ッ、

志野　弟は大陸で死にました。実家には、骨かなにか分かりませけど、白っぽいような欠片と、弟の識別票だけが送られてきました。でもまだ結局、大陸の戦いも終わっていないじゃありませんか、だったら弟はなんのために、

比留間　無駄というのか？弟の死が？――幾千万の前線で戦う兵士達に不敬！兵士達は死してなお英霊として国を守る。靖国に宿る。それでも死が無駄というのか？

志野　英霊……、

比留間　何が可笑しい。

志野　なんねそれ、

比留間　――、

志野　それはなんね！弟はいっぺんも鹿児島（カゴッマ）を出たこちゃなかよ。やっとに大陸に行った。東京も知らん、靖国もどこにあるかも！そいでも靖国に還っとぉ？英霊になっとぉ？あげな村の景色しか知らん子が、

比留間　（志野を殴ろうと）

敬三　出て行け！

常一　志野さんの言う通りじゃ！歩いちょって、山でも海でも、誰に話聞いても分かる。死んだ人はどこに行くんか？――教えてくれる。大抵生きちょったところに――生きちょったとき大事じゃった場所に、大事じゃった人の近くへ還ってくる、そう思うちょる。山なら山、海なら海、ご先祖の一人になって、ずーっと傍にいて守ってくれる。死んでく人も、死に際の願いごとだけは、たった一つ叶うような、そんな気がしちょる。やけぇ日本人は死んでいくんが怖ぁない。想う誰かの傍に行って、守れるような気がするけえ！あんたらは英霊なんてもんを勝手に作って、この日本に元からあった想いを戦いに利用しとるだけじゃ。

比留間　……貴様、

比留間、銃を突き付ける。りく・かつら、悲鳴を飲み込む。

常一　ほれ！見てみろ。これじゃろう？！現地の人らはこういう心地で民族調査されんじゃろう？！そんなんで何を喋る？――たとえなんか喋っても、そんなもんに真（まこと）はない！これが、民俗学者の仕事か？

比留間　黙れ！

常一　民族が民族を支配する、そんな悪夢にちょっとでもかぶれるようなもんは、民俗学者じゃないわ！断じてないわ！

生田　宮本さん――なんであんたが学者を語る？あんたになにが分かる！

常一　分かる！民俗学者が耳を傾けるんはもっと別の――風の言葉じゃ。

生田　……あ？

常一　文字を持たんかったひとたちが親から子、口から口で伝えてきた言葉じゃ。ほんとに大事なことだけが、編み出された智慧だけが、記憶の中で伝わってる。その人たちは尊いもんを受けとっちょるちゅう自覚はないけえ、文字を持つ世代になっても何一つ書き残したりはせん。放っちょけば忘れられる、風に散る記憶じゃ。――時を越えてきた記憶を描き留めるんは、民俗学者以外にはおらん。そうして留めた言葉だけが時を越える！次の記憶になる！――それが民俗学者ちゅうもんじゃろうが……！

敬三、比留間と常一の間に入る。

敬三　撃つか？僕も一緒に。

茂木　大尉、

比留間　――ッ、

敬三　お引き取りを。

志野、立つ。毅然として比留間の元へ。銃に向かって手を差し出す。

志野　敷地の外までお預かりいたします。

比留間　（舌打ち、自ら仕舞う。茂木に引き上げ指示）

生田　表で待っていてください。すぐに行きます。

志野　ご案内いたします。

志野、先だって出て行く。比留間と茂木、常一を睨み出て行く。

りく、志野を案じて数歩――が、へたり込む。

かつら　りくちゃん、

りく　——今頃、足が震えて……、
生田　……その、
桐生　うん、
生田　間違ってはいないつもりです。理想はどうあれ、今、国に尽くす道は。
桐生　分かってる。きみの正義は間違っちゃいないさ……。あの時、建国大学に行けなかった。あれ以来きみはずっと、大陸の夢を見てるんだろう？
生田　……、

生田、研究者達に頭を下げる。

生田　——これで最後にします。答えを聞いたらもうここへは来ません。

研究者達、互いの顔を見る。

吉永　俺は、
林　ああ。
吉永　資料の整理が終わったら実家に帰ろうと……、
生田　実家？それは、
吉永　帰って召集令状が来るのを待ちます。
桐生　——吉永、
吉永　二〇歳の時の検査で、これでも甲種に合格しているんです。年齢的にも遅かれ早かれ。生田さんと一緒に行きたい気もしますが、俺の実績じゃ徴兵免除にはならんでしょう。
生田　待てよ。所長に話してみるから、
吉永　いいんです。俺は生田さんや桐生さんみたいに東大を出てるわけじゃない。自分なりに一生懸命、楽しく研究してきた、でも一人の研究者としてずば抜けた何かを残せたわけでもない。平凡——それが俺です。
敬三　違う。吉永君、きみは、
吉永　今、多くの日本人が体験する、その同じ体験をこの身でもって識る。これ以上の役目がありますか？……行かせてください、先生。
敬三　——、
かつら　格好つけて。腰抜けの風上にもおけんな。
林　腰抜けじゃない、ナメクジ、
かつら　ナメクジの風上にもおけん、（吉永を叩く）
吉永　イテ。ちょ……、
生田　桐生さんはどうするんです？
桐生　そうだな……。俺も何度も想像した。海を越えてみたい、

生田　はい、
桐生　けどな。この身体だ。
生田　治ってから合流してください。一年かそこらあればきっと！
桐生　約束はしない。俺が治るより早くこの戦争が終わるかもしれんしな。
生田　……、
桐生　先生、お願いがあります。俺を保谷に置いてもらえませんか？資料の倉庫番に。
敬三　いい医者なら探す、だからきみはちゃんと、
常一　そうです、倉庫番なら自分が、
桐生　仕事を取らないでくれよ常さん。資料管理なら今の自分でも役に立てる。そう思えます。今の俺に必要なのは、治療よりも……。
かつら　――どうせ、どこで寝とっても気になってしゃあないんやろ？空襲警報が鳴るたんびに裸足で飛び出されてもかなんし。センセ、本人もこない言うてるし、許したってえな。
敬三　……分かった、
かつら　ほしたら志野さんに言うて、白和え、作り方教えてもらわんと。
桐生　白和え？
かつら　好きやろ？
桐生　来る気か、
かつら　今更、
桐生　なんで、
かつら　あ？
桐生　自由なんだお前は。もう資料収拾の仕事もない、どこに行ったっていい。こんな……先も分からん病人に縛られることは。
かつら　それを決めるんはうちや。
桐生　だったら！――いい加減逃げるのはよせ。
かつら　逃げる？
桐生　……両親から言われてる。こんな時だから余計、――決めた相手なら連れてこい。
かつら　……、
桐生　顔を見せてくれるだけでいい、一度でいいから。
かつら　嫌や。
桐生　おい、
かつら　あんたこそ何遍言わしたら気ぃ済むん？うち、あんたとどうこうなる気はないで？うちみたいな者（もん）の血ィであんたの家、穢すわけにいかんやろ？
桐生　だからそれは、

かつら　うちの問題やねん。
りく　……どういうことですか、
かつら　話しとらんかったな。うちなぁ大阪の蜜柑山ちゅうとこで生れたんや。
常一　かつらさん、あそこに居ったんか。
かつら　常さん、密柑山知ってんの？
常一　教師をしとった頃、淀川だの、あの辺にも聞き書きに歩いて、
りく　――（密柑山って？）、
かつら　乞食の巣窟や！
りく　……乞食、
かつら　それがうちや。元から混じるはずのないもんやったんや。なのにあんたが、あんたらが、うちらみたいなもんの世界に手ェ伸ばそうとするから。
吉永　かつらさん、
かつら　どうせ酔狂や、そう思てたのにな。……ここにおんのに慣れて、いつのまにか夢見とっただけや。
敬三　かつらくん。きみのおかげで収拾できた資料が沢山あった。ありがとう。
かつら　……ほら。センセはうちみたいなもんにもそう言うてくれはる。あんた、さっさと身体ようしてセンセの役に立たんと。
桐生　分かってる。
かつら　それから、あんたの家にもちゃんと似合いの嫁さん貰い。
桐生　貰わん。
かつら　貰い。今やのうても、
桐生　貰わん。
かつら　……阿呆やな、ほんま。
林　――そいじゃあまあ俺が。行くか。なあ生田。
生田・吉永・常一　（それぞれに）林さん、
桐生　……林、
林　あんたの目になってやるよ。桐生さんが見たいもの、代わりに見て来る。（生田に）言っとくけど、軍の言いなりにはならんぜ。俺は俺のために行く。
常一　本気ですか？
林　誰かがやんなきゃなんねえっつぅんなら――せめてなあ。ここで学んだ者として、ちっとはマシなことができるかもしれん。万が一、現地の人らの小さい神さんと出逢ったら……、俺が盾になる。誰にも手出しさせん。
りく　……おっきな盾ですね、
かつら　ざっくりしてるけど。
林　ざっくりって何だ。先生、俺もお願いが。ちょっと、

林、集会室続きの日本間から絵を取ってくる。敬三に差し出す。

敬三　これは、
林　俺の「花祭」。先生に預かっていただきたいんです。
敬三　帰って来い、きっと。
林　……常さんはどうする？
常一　わしは――そんなら、ここを守ります。調査のまとめをしながら、
敬三　きみは大阪に帰りなさい。
常一　先生、
敬三　まとめならどこでも出来る。かみさんと息子の傍にいてやれ。
常一　……ええ、でも。――そしたらここは？ここはどうするんです、
敬三　眠らせておこう。しばらくの間。火を絶やすわけじゃない、灰の中の熾きのように。多分、僕にとってもその方がいい。……僕もここにいながら戦争の真ん中へ行く。

敬三、林の絵をよく見えるところに大切に置く。踊り出す。

敬三　♪テーホヘテホヘ。テホトヘテホヘ……、
林・吉永　先生？！
敬三　（舞いながら）行きたかったなぁ。もう一度。みんなでさ。――死ぬなよ。みんな。……生田君、きみも。

テーホヘテホヘ、テホトヘテホヘ。「花祭」榊鬼の踊り。
率先して林、吉永が敬三について踊る。続いて桐生、かつら。
生田、立ち尽くしていたが深く礼をして、出て行く。
やがて吉永、一同に敬礼をして出て行く。
よろめいた桐生を、かつらが支えて出て行く。
林、別れるように絵を見つめ、敬三に頭を下げ、出て行く。
敬三ひとりになる舞……。それは神に捧げる祈りのように見える。

敬三　――生き延びろ。宮本くん、
常一　待ってください、自分は、
誉子　あなた？

本宅側から誉子が来る。

敬三　誉子、
誉子　今、志野から聞きました。あなた、日銀に。

敬三　ああ……うん。言いに行こうと思っていた。
誉子　では、本当なんですね……。すいません、私、我慢していたんですけれど。
敬三　――、
誉子　おめでとうございます。信じてきた甲斐がありました。第一銀行の副頭取は、あなたのお祖父さまのご威光ですけれど、日銀の副総裁は、正真正銘、あなたご自身のお力ですもの。あなたが世間に認められたんです。私の父もきっと喜びます。これでやっと岩崎の家にも顔向けが、
敬三　……、
誉子　あなた？
敬三　――うん。そうだね。
誉子　さっそく父に伝えてきます。
敬三　……ああ。僕も（行こう）。

誉子、笑顔で先に立って出ていく。

常一　先生、
敬三　――（常一に、何か言いかけようとするが）、
常一　……先生！

敬三、集会室をぐっと振り切るように出て行く。

常一　――眠らせるってなんじゃ……、ここにいったん点いた炎をどうやって鎮めりゃええんかの？……（笑う）
りく　――宮本さん？
常一　高い高い山に連れてこられて放り出された気分じゃ。りくちゃん、わしはの、検査の時には肺がまだ治っちょらんかったけえ兵隊には不合格じゃ。大阪戻って工場だの教師だの務める。それでもええ。じゃけえ、ここにあるもんは？ためてきたもんは？
りく　……、
常一　戦場にも行かん、ここにおることもできん、ほしたらのお、わしはどこに行きゃあええ？
りく　それは。……せいだと、
常一　あ？
りく　旦那様のせいだとそう仰りたいんですか？……見損ないました。ずっと前から思ってた。私、あなたのことが嫌いです。
常一　は？
りく　嫌いです！だって勝手じゃないですか。いつ帰ってくるかも分からない、旅

に出れば行きっぱなし。ご家族もいるのに、
常一　それはわしだって。でもこれがわしの仕事じゃけえ。先生に言われた通り、
りく　ほらまた旦那様！そうやって旦那様を言い訳にして。
常一　……、
りく　旦那様は確かに宮本さんにお仕事をお言いつけになったんでしょう、でも、あんな無茶苦茶な旅をしろと誰が仰いました？結局あなたは、旦那様は関係ないんです。最初に背中を押したのは旦那様かもしれませんけど、あなたは自分で、さんざ好き勝手に歩いてるんです。その方が、あなたが楽しいから、楽しい？
常一　旦那様を隠れ蓑にしてるだけ！ずるいんです！
りく　――りくちゃん、いくらなんでもそりゃあ、
常一　ええ。ずるいんです。本当はあなたが勝手なのに、そうじゃない振りしてる。
りく　――元から勝手なんですから、落ち込む必要ないじゃないですか？他の方がどうなろうと、旦那様がどうなろうと。――ここがどうなろうと！
常一　……、
りく　あなたはとっくに、ご自分の意志で歩かれてるのに。
常一　……りくちゃん、
りく　私、――研究の詳しいことはわかりませんけど、でも、ひとつだけ分かります。あなたが尋ねて歩いた方達は、旦那様と繋がってるわけじゃない。あなたと繋がってるんです。――私、知ってます。あなたは本当に勝手だけど、その人たちのことは裏切らないから、
常一　……、
りく　――、

常一、仕舞っていたノートをりくに渡す。

常一　わしがここに来た日から付けとる日誌じゃ。あんましここには居らんかったけえ、そんなに書いちょらんけど。またここが開いたら続きを書く。
りく　――『アチック・ミューゼアム　１９３５』、
常一　持っちょって欲しいんじゃ。りくちゃんに。
りく　分かりました。お預かりします。――待ってますから。
常一　ん？
りく　約束します、私――皆さんがお戻りになるまで、ここはこのままで。

りく、ノートを持って集会室を出ていく。

常一　――それがわしの民俗学、

常一、荷物を背負う。前を見つめる。

第八場

空襲警報が響く。逃げ惑う人々、街の情景へと塗り替えていく。
人々の動きとともに戦時下の時が一気に凝縮され加速していく。

＊

非常持ち出し用の荷物（前景と同じ）を背負った常一、来る。
動けない人、転んだ人に手を貸し、避難させる。人々の悲鳴や怒号、
泣き声――混乱の渦を受け止め、常一はつと空を見る。
荷物を背負った真木、走ってくる。常一を掴まえる。

真木　あんた！
常一　真木、
真木　何突っ立ってんの！
常一　見い。Bがあんな低うを飛んじょる。民家を狙っちょるんじゃ。
真木　ええから早よ！
常一　先に行け――、（逆方向に走り出そうとする）
真木　あんた！
常一　嫌な予感がする。持てるもんだけはせめて、
真木　埋めてきたやないの、大事なもんは、
常一　燃えたら取り返しがつかんのんじゃ！
真木　たかが原稿、命とどっちが大事なん！？
常一　ええけえお前は先に、
真木　ほんならうちも行く！
常一　真木！
真木　やっと帰って来たんやない。死ぬ時は一緒や。

と、空襲がはじまる。爆撃音。常一、真木と共に伏せる。
地上の炎で空が鮮やかな紅に染まっている。
地上には人々の影が黒く蠢く。
爆撃音が引いてくると、常一立ち上がる。家の方角が焼けている、
空の鮮やかさに呆然と立ち尽くす。

真木　――家の方や、
常一　ああ……、

常一の目には、自宅と共にすべての原稿が焼けていくのが見える。
燃え上がった原稿は黒い紙片となって爆風に舞い、降ってくる。
空の紅は、やがて朝日の中に溶けていく。

＊

昭和二〇年（１９４５年）三月。空襲の三日後。
一面の焼け野原となった大阪、家の跡地に立ち尽くす常一と真木。

真木　だだっ広い空やな。あんなゴミゴミしとったのにな。
常一　……、
真木　ちーちゃんだけでも疎開させとってよかったな。うちらも周防大島ついたらお握り食べたいな。
常一　……、
真木　――いつまで見とっても還ってこうへんよ。行こ。
常一　……先、行っちょってくれんか？

常一、きつく握りしめた両の拳を開けると、黒い紙片の残骸が散る。

真木　あんた……もしかしてまだ……。――何考えてんの？焼けてしもたやない。あんたが一〇年賭けてきたもん全部。
常一　……ああ、
真木　目ェ開けてよう見！この景色！目ェに映ってるもんが現実や！……なんで？これ以上傷つくことないやん。残ったもんは正真正銘、真っ裸の命ひとつや――なにができるて言うのん……、あんたの民俗学は終わったんよ！
常一　終わっちょらん！終わるわけにはいかんのじゃ……。まだ、諦めるわけには。
真木　おかしいわ。あんた。……みんな息吸うてただ生きてんのがやっとやのに。顔上げてる人なんて一人もいてないのに……！
常一　――ああ。
真木　……もうええ。もう知らん……。うち、もうあんたを待たん。
常一　――真木、
真木　行くわ、周防大島。ちーちゃんとあんたのお義母さんと三人で仲良う暮らす。あんたなんておらんでもな、ちーちゃんとお義母さんだけ家族に、

常一、一瞬だけ真木を強く抱く。

常一　生き延びてくれ。

常一、焼け野原の大阪を歩いていく。

真木　帰ってくんな！……阿呆、

真木、常一の後ろ姿を睨んでいるが、反対方向へ歩き出す。

第九場

田川松太郎が歩いてくる。村はずれの慰霊碑を拝む。
慰霊碑だが、それは無銘の、どこにでもある石のようなもの。
そこは、中国地方脊梁山脈、かつて常一が訪れた村の峠。
荷物を背負った常一、歩いてくる。

常一　ここは、相変わらずええ風が吹いちょるの。
松太郎　――常さぁ。……あんた、よう無事で、
常一　爺さんこそ。
松太郎　わしなんて生き長らえちょってもしょうがねえに……生きちょって欲しい者から……、
常一　ああ……。こっからなら村がよう見えるな、

常一、松太郎の隣で手を合わせる。二人、峠から村を見おろす。

松太郎　せっかく来てごいたがの……悪ィが今は。
常一　今日は民俗調査やない、別の――農民同士、話そう思うてな。
松太郎　農民同士……？
常一　爺さん。大阪は焼き尽くされた、東京も。食うもんがまったく足りんのじゃ。食糧供給がどうなっちょるんじゃ思うて大阪府庁に行ったらの、農家からの供出が滞っとるちゅうて。
松太郎　それで（そーで）？常さぁが代わりに回っちょるんか？食いもん差し出せ言うて。
常一　……調査を引き受けた。役人よりかはよっぽど、わしの方がいろんな農家と顔見知りになっちょるけえの。
松太郎　わしらだって骨を削っちょる。でもな（だぁも）、上から言われるんのはの、とうてい無茶な……、
常一　……、
松太郎　……もう疲れた。国の命令に尽くすのは。尽くしても尽くしても国はわしら

から刈り取ってく一方じゃ。作物も命も。正直、なんのために尽くしちょるんか――焼け跡も干上がっちょる、わしらも。外で戦う兵隊も。こいつらが流した血イは何も潤さん。乾いた土に吸いこまれただけじゃ。これ以上、村からなんも出しとうないんよ……、

常一　……、

松太郎　常さぁにも家族がおるだろ？こげなとこに来らんで一緒に居ってあげ。

常一　……そうできたら――ちゅうてな、思うた。自分でもなんで行くんか、

松太郎　……常さぁの家は、

常一　焼けた。なんもかも。――書き溜めちょった原稿も。

松太郎　原稿……？

常一　二万枚はあったじゃろうか……、まとめ途中のノートも。取り返しはつかん。記憶をなぞって書いてみたところでそんなもんはもう別のもんじゃ。……同じ話を二度と聞くことも、それどころか、二度と会えるかも分からん。焼け跡に膝ついて、うずくまりたかった――でもな、顔が浮かんだ。爺さんの。それからこれまで会った沢山の……。原稿は焼けてしもうた。でも、わしは確かに記憶を託された、そのことだけは、消えん――一生、

松太郎　……誰もあんたにそげなつもりで話したんじゃない。あんたの重荷にするつもりは。そげだあ、――元から忘れられるもんじゃった。わしらが死んだらこのまま消えてくだけの。

常一　でも、受け取った。今度はわしが還していく番じゃ。

松太郎　還す、……消えてしまったもんを？

常一　わしが受け取ってきたんはな、人が生き延びてきた意志じゃ。生きたいと願う心じゃ。わしや爺さん、わしらに続く者たちが生き延びるために。日本人が生きて続いていくために。

松太郎　……、

常一　爺さん。国のために言いなりになって食糧を出せちゅうんじゃない、これはの、新しい仕事じゃ。

松太郎　……仕事？

常一　この戦争はきっと近いうちに終わる。日本は負ける。

松太郎　……、

常一　負ける。負けた後にの、もう一遍、日本をはじめるための準備を今からするんじゃ。わしなら誰の所にいきゃあええか分かる。きっとそのために歩いて来た。一〇年掛けて。

松太郎　――ほんなら常さぁは、そのために回っちょるんか？役人の手先になって？

常一　協力してくれんか？

松太郎　じゃが、どげすりゃええ？……出しとおても。

常一　芋の葉でもええ。茎でもええ。腹に入りゃなんでもええ！農林省に言うて、

わしが野菜として認めさせる。

松太郎　……正気か？無茶苦茶じゃ。

常一　無茶苦茶でええ。いつか笑い話にすりゃあええ。供出目標ならわしがちゃんと報告書を出す。やけえ――爺さん達も考えてくれ。この野山に食えるものがどれだけあるか。

松太郎　分かった。わしらだって生粋の農民じゃ。心の底じゃ誰一人飢えさせたいわけがない。――この辺の村は、わしが説得する。みんなで生き延びるんじゃ言うて。

常一　……ああ。

常一、もう一度慰霊碑に手を合わせると荷物を背負い直す。

松太郎　行くんか？――一服していかんか？

常一　いや。次があるけえの。

松太郎　――次、

常一　これまで知り合いになっちょったとこ全部いくつもりじゃ、次の村。次の山。

松太郎　そりゃあ――（笑う）、帰る暇がないの。

常一　家族は、おらんもんと思うてくれちょる。

松太郎　ひどいの。

常一　詫びる。いつか。終点まで行き着いて戻ったら。

常一、歩き出そうとする。

松太郎　舟のようじゃの。

常一　え？

松太郎　いつかのわしの親父みたいに。渡って行く舟――次の島、次の岬、

常一　……せっかく集めた積荷は全部焼いてしもうたが。

松太郎　構わん。常さぁの積荷は元から目に見えんもんじゃ。

常一　ほしたら……届けんといかんな。わしの身体ひとつで。いつか沈みゃせんとええがの。

松太郎　大丈夫じゃろ。常さぁは親父らみたいな丸木舟じゃない。きっと、インドまで行ける舟じゃ。

常一　……インド、

松太郎　おうよ。

松太郎、常一に手を挙げて去る。

常一　爺さん。ありがとう。

常一、歩き出す。

＊

常一への手紙を綴る、りく、志野、かつらが浮かぶ。

集会室の机には、研究をする桐生・林・吉永・生田の姿がある。

りく　宮本さん。大阪の方はご無事でしょうか。この手紙、無事に着くといいのですが。

志野　時々想像してみます。林さんが無骨な手を広げて小さな神さまを守るのを。生田さんが軍人たちを押しのけてノートを構えているのを。どこかの密林で、草原で。そこはきっと、ここととは違う風が吹いていて、でもお二人のお顔は、泣いてるのか笑ってるのか、私にはうまく想像できません。

かつら　あの人、笑いながら逝ったわ。あの人がもうあかんようになったとき、センセが日銀から抜け出して枕元に来てくれはった。あの人が好きやったお酒、最期やから言うて、筆に含ませて唇をなぞってくれはってん。あの人にっこり笑(わろ)た。きれいやったなぁ。ほんま幸せやったと思う。資料の整理もちゃあんと全部終わらしたしな。

りく　この間、吉永さんから手紙が来ました。吉永さんが乗った船は、フィリピン上陸前に撃沈されて、吉永さんは病院に入れられたんですって。入院中に、あちらの民話、集めてたそうです。一寸法師に似た話があったって大興奮で書いてありました。けど今は怪我が治って、今度はルソンというところへ発つそうです。あれきり、お手紙はありません。

常一、人々と景色をはるかに見渡す。

第十場

昭和二〇年七月（１９４５年）。正午近く。

日本常民文化研究所（旧アチック・ミューゼアム）、集会室。

りく、車が入り人影が降り立つのを見て、本宅の書斎に声を。

りく　旦那様！車が戻って参りました。宮本さんが陸軍省から、――陸軍省からお戻りになりました！

りく、研究所玄関に常一を迎えに出る。

りく　宮本さん、

常一、玄関側から廊下を歩いてくる。

宮本　只今。

りく　お帰りなさい。ご無事で。

宮本　りくちゃん、先生を。軍務局の方をお連れした。

比留間と茂木、玄関側から入ってくる。

りく　あなたは、

比留間　そう怖い顔をするな。屋敷も焼け残って何より。

りく　……恐れ入ります。その、あなたですか？宮本さんを呼び出したのは、

本宅側から敬三が来る。

敬三　おかえり、宮本くん。

常一　渋沢先生。

敬三　――比留間大尉、でしたか？いつぞやは。

比留間、敬礼する。

比留間　現在の階級は少佐です。軍務局戦備課に配属され任務に当たっております。

敬三　すると物資の生産統制、

比留間　は。本日は、陸軍省軍務局戦備課長 佐藤裕夫大佐の代理で参りました。以前この屋敷で銃を抜いたご無礼、お許しを。

敬三　いや――とにかく中へ。

比留間　は。

敬三　ちょうど昼時分、よかったらご一緒に。

比留間　いえ、自分は。

敬三　（りくを見る）

りく　それでは、お席が整い次第お声掛けにまいります。

りく、去る。常一にどのような話があるのか気に掛けながら。

敬三・常一・比留間・茂木、集会室の中へ入る。

敬三　それで。軍務局戦備課が宮本に何か。もう伺ったのか。

常一　はい。出頭しましたら、すぐに参謀室に通されました。そこで大佐から直々にお話しがありました。「政府の力で食料を配給できるのは、長く見積もっても八月末までが限界……」、

比留間　「それ以降は、各地で自給体制を取らねばならない。米がとれる十月まで何で食いつなぐか、宮本さんのご協力を仰ぎたい」。

敬三　……なぜ宮本に。

比留間　食料が一番不足しているはずの大阪が、四月以降比較的、食料供給の安定を見せているのはなぜか。調べましたら、影に宮本さんがいると。大阪府長、篤農協会の会長からも推薦が。

敬三　（常一を見る）

比留間　宮本さんがお引き受けくださるならば陸軍でしかるべき階級を用意します。そうすれば、宮本さんはもう民間人ではなく、軍部の権限の中で、

常一　比留間少佐。――この屋敷に戻り渋沢先生同席のもと、お話しの続きをしたいと申しましたのは、あちらでは話せない話がしたかったからです。

比留間　ええ。――なんでも。

常一　そのつもりで伺います。

比留間　（頷く）

常一　でしたら、それは、何のために？――私が動き、各地の農家から食料を出させる。それは何のためでしょうか？

比留間　――どういう意味です、

常一　軍務局の考えを伺いたい。……この戦争は勝てますか。

比留間　……我が大日本帝国は最後の一人となるまで死を怖れず、

常一・敬三　……、

比留間　（茂木に）外せ。

茂木　は、

比留間　聞こえんか？席を外せ！

茂木　ハ！

茂木、出て行く。

比留間　――おそらく、八月末までには始末が着くのではないでしょうか。

敬三　始末、

比留間　その時を迎えた暁に、食料暴動が起こらないようにしたい。それがこの打診の本位です。

常一、敬三、互いの顔を見る。

常一　本心なのですね。ではその意志を一分でも早く実現させてください。人間が生き残らなければ国はない。

敬三　比留間さん。どうか。（比留間に頭を下げる）

比留間　――は。

敬三　これもお伝えを。――宮本は頼りになると思いますが、軍部の言いなりには動かないこともあるでしょう。そのことをよく理解しておいてくださるなら、それは。――その、これだけは自分の個人的見解ですが、

比留間　どうぞ、

敬三　……思い出していました。かつて、宮本さんについて歩き通した時のこと。正直こうして話しに来ても、自分個人は、宮本さんが軍の嘱託になるとはハナから思っちゃおらんのです。

比留間　――本当の仕事はこれからとそのつもりで努力します。

りく　……は。

常一　失礼いたします。

りく、入ってくる。

比留間　お食事の用意が整いました。よろしければ応接室へ。

りく　ありがとう。りく。あれも出しておいてくれないか。

敬三　あれ、と仰いますと。……（気付く）！かしこまりました。

りく、去る。

敬三　比留間さん。食事と言っても、こんな時です、たいしたものは用意できませんが。ただ一つ、葡萄酒があるんです。祖父がナポレオン三世から貰ったものです。

比留間　フランスの葡萄酒、ですか。

敬三　負け戦ときまれば、あれを我々で空けてしまいましょう。いかがです。

比留間　それは――うまいのでしょうな。

敬三　色々話を伺わせてください。戦局、それから民族研究所のこと……、

比留間　……ええ、

敬三　宮本くん、比留間さんを応接室に。

常一　こちらです。

本宅側の廊下から誉子が来る。常一、誉子に礼をして擦れ違う。

比留間、誉子に目礼して、常一についていく。

誉子　あなた、
敬三　誉子、
誉子　宮本さんは大丈夫でしたの？りくと志野が話しておりました。
敬三　大丈夫だよ。話は終わった。それで様子を見に来たのか？
誉子　そういうわけではございませんが。
敬三　誉子。戦争は終わるそうだよ。
誉子　……やっと。
敬三　ああ。
誉子　そうしたらまたあなたは、
敬三　ん？
誉子　いえ。――こちらの研究所、また賑やかになりますね。
敬三　いや。多分もう無理だろう。
誉子　え？
敬三　この国はな、あまりに大きな借金をした。国民に返せるアテのない借金を。国が金を返す道はな、誉子、この戦争で儲かったところから差し出して貰う他はない。
誉子　……、
敬三　君のご実家に恨まれることになるだろうな。
誉子　三菱に出させるのですか、
敬三　三菱だけじゃない、すべての財閥、特権階級から。――その時にはうちも。僕は率先して差し出す覚悟だ。土地も屋敷も。
誉子　……手放すのですか、
敬三　覚悟があると言っているんだよ。これだけのことがあったんだ。責任を取らんわけにはいかんだろう。
誉子　……、そうしたら、
敬三　うん。
誉子　どう、生きていけばいいのですか。
敬三　どうということはない。当たり前に。名もなき人たちの一人となって。
誉子　ですが私は、これ以外の暮らしを知りません。
敬三　怖れることはない。無くす物も多いだろうが、手に入るものもある。
誉子　手に入るもの？
敬三　自由。僕はまず旅をするつもりだよ。宮本くんについて歩いてもいい。疲れたら土手で昼寝をしたって。赤とんぼが飛ぶ空を見ながら、
誉子　……罵られるでしょうね。あなたは。
敬三　何を言われてもニコニコしていればいいんだ。ニコニコ没落していけば。
誉子　――ずっと考えていました。研究所なんて、なくなればいい。

敬三　ん？
誉子　……研究所がなくなれば、あなたは少しはこちらを向いてくださるかと。でもあれですわ、無くなっても、ちっとも気分の晴れるものではございませんのね。……研究所があるうちは恨むこともできましたけど、今は。
敬三　……、
誉子　「名もなき人たち」、――あなたは最初からそちら側にいらっしゃる。父が案ずるのも当然です。あなたは、こちら側を――私たちを守るべきお方としては出来損ないなんです。
敬三　――かもしれん、
誉子　……父は、全力であなたのお仕事の壁となるでしょう。
敬三　だろうな。他でもない僕が、僕ら自身にとどめを刺そうとしているんだ。そうなればただではすまん。誉子、迷惑を掛けるが、
誉子　お気遣いは無用にございます。
敬三　……、
誉子　自由。あなた先ほどそう仰いましたね。でしたら私――出て行きます。
敬三　……誉子、
誉子　それ以外道はないのでございましょう？あなたの信じる道は。
敬三　ああ。
誉子　でしたら存分におやりなさいませ。誰に気兼ねすることなく。
敬三　……、
誉子　……勘違いなさいませんように。私はあなたのように笑って没落することはできません。三菱財閥、岩崎家の者として最後まで胸を張って。
敬三　ああ。――分かってる。ああ……、
誉子　いつかすべてが終わって……時が経てば。あなたと、また笑いあえる日が来るでしょうけれど。……長生きしてください。
敬三　――、
誉子　失礼します。
敬三　誉子、
誉子　はい。
敬三　その――応接室に来てくれないか。
誉子　応接室？
敬三　客人と食事をするが――葡萄酒があるんだ。どうだろう。君も一緒に。
誉子　ええ。……いただきますわ。

敬三、誉子を伴って集会室を出て行く。

＊

焼け跡の広野に人々が集まってくる。終戦後の東京駅付近。

常一、旅支度を調え、人混みの中を歩いてくる。
やがて敬三も来る。背広を脱ぎ一労働者のような格好で。

敬三　――待たせたね。
常一　いえ。行きましょうか。
敬三　すごい混みようだな。たくましいな、人は。
常一　ええ。
敬三　これじゃいつ列車から振り落とされるかわからん。
常一　かまいません。それでも。振り落とされたら歩いて行けばええ。
敬三　歩いて、
常一　はい。――行けるところまで。この地面を。

二人、立ち上がっていく街を見渡すと、連れ立って歩き出す。
その背に午後の日差しが降り注いで――。
二人の姿は人混みの中に消えていく。

【了】

〈引用〉宮本常一「周防大島を中心としたる海の生活誌」
「忘れられた日本人」